

ニ從フヘシ但將來ハ少クモ武士領所有者十名其選舉ニ加ハラサレハ其効ナシトス

第十條 選舉權ヲ有スル者ノ氏名簿ヲ作り選舉ノ場所期日ヲ定メ及ヒ選舉委任者ヲ命スルハ州長ノ職務ナリトス

第十一條 世襲ノ古キ土地所有者組合ノ選舉人十名ニ足ラサルキハ州長ヨリ定メタル十名以上ノ選舉人アリ最近ノ組合ニ合併シテ其組合ヨリ申立ツヘキ員數ヲ選舉スヘシ

第十二條 此布告及ヒ千八百五十四年十月十二日ノ上院編制法ノ改正ハ千八百五十三年五月七日ノ上院編制法第一章ニ從テ將來ハ兩院ノ承諾ヲ以テ發シタル法律ヲ以テ爲スコトヲ得ルノ

千八百五十三年五月七日ノ法律ニ因テ廢セラレタル舊第六十五條ヨリ第六十八條ハ左ノ如シ上院ハ左ノ者ヨリ成ルヘシ

一 丁年ノ皇族

二 普魯西國ニ於ケル往古帝ノ直轄シタル規則ノ戸主及ヒ國王ノ布告ヲ以テ直系ノ嫡男相續法ニ從ヒ議員タルノ權ヲ與ヘタル家ノ戸主此布告ニハ議院タルノ權ヲ有スヘキ土地ノ性質ヲ定ムヘシ議員タルノ權ハ代理人ヲ以テ之ヲ行フコトヲ得ス且未丁年中又ハ獨逸外ノ國ニ於テ官吏タル間又ハ普國外ニ住居スル間ハ停止スルモノトス

三 國王ヨリ終身任シタル者其數ハ一二ニ掲ケタル議員ノ十分ノ

一ヲ越ユ可カラス

四法律ニ定メタル選舉區ニ於テ最高直接國稅ヲ納ムル原選舉人

三十倍ノ員數ニテ直接ニ選舉シタル議員九十名憲法第七十條

五法律ニ從テ大ナル鄉ニ於テ團結長官ヨリ撰ヒタル議員三十名

一ヨリ三マテニ掲ケタル議員ノ總數ハ四五ニ掲ケタル數ヲ越
ユ可カラス

上院ヲ解散スルハ其効ハ止タ選舉シタル議員ノミニ及フヘ
シ(國王ヨリ任シタル者ニ及ハス)

第六十五條ニ定メタル上院編制ハ千八百五十二年八月七日ニ
之ヲ爲スヘシ

此期限マテハ千八百四十八年十二月六日ノ上院選舉規則ニ從
フヘシ

上院ノ選舉期限ハ六年トス普魯西人ニシテ滿四十歳ニ至リ公
權ヲ有シ五年間普國民タル者ハ上院ノ議員タルコトヲ得

上院ノ議員ハ旅費日當ヲ受クルコトナシ

第六十九條 下院ハ三百五十二人ノ議員ヨリ成立ツヘシ選舉區ハ法
律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ其區ハ一郡又ハ數郡又ハ一鄉又ハ數鄉ヨリ
組立ルコトヲ得

議員ノ數ハ國境ノ増加ニ因テ現今ハ四百三十三人ニ至レリ選舉
區ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘキ者トス何トナレハ其區ヲ定メサレ
ハ黨派ノ不平均ヲ生スレハナリ故ニ之ヲ要用トス(千八百四十九
年五月三十日
ノ下院議員選舉規則及ヒ千八百六十年六月
二十七日議員選舉區畫規則ヲ參看スヘシ)

第七十條 滿二十五歳ノ普魯西人ハ其住所及ヒ選舉權ヲ有スル團結

ニ於テ原選舉人ト爲ルヘシ
數箇ノ團結ニ於テ選舉權ヲ有スル者ハ一團結ニ於テノミ原選舉人ト爲ルヲ得

第七十一條 人口二百五十人毎ニ選舉人一名ヲ選ムヘシ原選舉人ハ直接國稅高ニ從テ之ヲ三等ニ分チ各等ノ稅高ハ總稅高ノ三分ノ一ニ當ルヘシ其總高ハ左ノ如ク計算スヘシ

- ① 一團結ヲ以テ一原選舉區ヲ編制シタルモハ團結毎ニ計算ス
 - ② 數團結ヲ以テ一原選舉區ヲ編制シタルモハ區毎ニ計算ス
- 第一等ハ總高三分一ノ最高稅ヲ納ムル原選舉人ヨリ成ルヘシ
 第二等ハ總高三分一ノ中高稅ヲ納ムル原選舉人ヨリ成ルヘシ
 第三等ハ總高三分一ノ最下稅ヲ納ムル原選舉人ヨリ成ルヘシ

各等ニ於テハ各別ニ選舉人ノ三分一ヲ選ムヘシ
 各等ハ數箇ノ選舉區ニ分割スルヲ得但每區ハ原選舉人五百名以上ヲ有スコカラス
 選舉人ハ各等ニ於テ其所屬ノ等ニ拘ハラヌ原選舉人ヨリ之ヲ選フヘシ

第七十二條 議員ハ選舉人ニ於テ之ヲ選ムヘシ
 選舉ニ關スル詳細ハ選舉規則ヲ發シテ之ヲ定ムヘシ其規則ハ直接稅ノ代リニ穀肉稅ヲ納ムル鄉邑ノ選舉法ヲ定ムヘシ

千八百四十九年五月三十日ノ選舉規則アリ附録ヲ參看スヘシ則
 第一條下院ノ議員ハ大選舉區ニ於テ選舉人ヨリ選ハレ選舉人ハ小選舉區ニ於テ其區民ヨリ選ハル則チ直接間接ノ選舉ノ異ル所

ナリ

第四條 人口二百五十人毎トニ選舉人一人ヲ選フヘシ

第五條 人口七百五十人ニ充タサル團結又ハ團結ニ屬セサル土

地ハ郡長ヨリ接近ノ一箇又ハ數箇ノ團結ト合併シテ一選舉區

ヲ作ルヘシ(三人ニ充タサル選舉人ヲ選フヘキ人口ヲ有スル所

ハ之ヲ數箇ニ合併スルモノハ三人以上ノ選舉人ヲ選ハシムルノ

趣意ナリ)

第六條 千七百五十人又ハ以上ノ人口ヲ有スル團結ハ團結ノ行

政官ヨリシテ數箇ノ選舉區ニ分ツヘシ其小選舉區ハ多クモ選

舉人六人ヲ選フヘシ(本條ハ六人以上ヨリハ多ク選フヘキ人口

ヲ有スル團結ヲ分テ六人以下ノ選舉人ヲ選ハシムルノ趣意ナ

リ)

第七條 小選舉區ハ成ルヘキ丈ケ之レヨリシテ選フヘキ選舉人

ノ員數ヲ三ノ數ヲ以テ割ルヘキ様ニ作ルヘシ此三トハ則チ區民

ノ租税高ニ從テ之ヲ三等ニ分チタルヨリ起リタルモノナリ(以

上ハ間接選舉ノコナリ)

第八條 何人ニテモ獨立シタル普魯西人ノ滿二十四歳ニシテ公

權ヲ有シ團結中ニ六ヶ月間住居又ハ寄留スル者ハ團結ニ於テ區

民ノ投票權ヲ有スヘシ但窮民救助ヲ受ケタルハ此限ニ在ラス

第十條 區民ハ區民ヨリシテ拂フヘキ直接國稅「分等稅地稅營

業稅」ニ從テ三等ニ分ツヘシ則チ各等カ總區民總稅高ノ三分ノ

一ノ稅ヲ各拂フヘク分ツヘシ

其總稅高ハ①一團結カ一小選舉區ヲ作ルカ又ハ數箇ノ小選舉區ニ分タル、其ハ(第六條)團結ニ從テ定ムヘシ

② 數箇ノ團結ノ集テ一小選舉區ヲ作ルハ(第五條)區ニ從テ定ムヘシ

第十二條 第一等ハ總稅高ノ三分ノ一ノ最高稅ヲ拂フヘキ者ノ區民ヨリ成立ツヘシ(第十條)第二等ハ總稅高ノ三分ノ一ノ中等稅ヲ拂ヘキ者ノ區民ヨリ成立ツヘシ第三等ハ總稅高ノ三分ノ一ノ最下稅ヲ拂ヘキ者ノ區民ヨリ成立ツヘシ此等ニハ全ク稅ヲ拂ハサル區民モ屬セリ

第十四條 各等ハ選舉スヘキ選舉人ノ三分ノ一ヲ選ムヘシ
一小選舉區ニ於テ選舉スヘキ選舉人ノ員數ノ三ノ數ヲ以テ分ツ

「能ハスシテ一人殘リタルハ第二等ニ於テ之ヲ選フヘシ二人殘リタルハ一等ニテ一人三等ニテ一人ヲ選ムヘシ
三等ニ分ツトハ例ヘハ一團結ヨリ三千「マルク」ノ直接國稅ヲ拂ヘキ場合ニシテ六十人ノ人口ヨリ之ヲ拂フヘキ其内二人ハ各五百「マルク」ヲ拂ヒ(則千「マルク」トナル)四人ハ各二百五十「マルク」ヲ拂ヒ(則千「マルク」トナル)五十四人ハ合セテ千「マルク」ヲ拂フノ類
第十五條 各團結ニ於テハ投票權ヲ有スル區民表(「ウールウエ」レリステ「ト云フ」ヲ作ルヘシ其表ニハ各區民ノ團結中又ハ數箇ノ團結ヨリ合ハシタル小選舉區ニ於テ拂フヘキ稅高ヲ記スヘシ而シテ其表ハ公ケニ揭示スヘシ揭示シタル場所ハ地方ノ慣例ニ因テ公告スヘシ

何人ニテモ其表ヲ正當ナラサルカ又ハ不十分ナリトシタルハ
 公告ノ後三日内ニ團結官署又ハ其官署ヨリ命シタル官吏又ハ別
 段設ケタル委員ニ書面又ハ言語ニテ故障ヲ申立ルコトヲ得
 其判決ハ邑郷ニ於テハ其官署、邑郷ニ非サル所ニ於テハ郡長ニ
 於テ之ヲ爲スヘシ

第十六條 各等ニ分ツコトハ小選舉區ノ(第五條第六條)區民表ヲ
 作ル同一ノ官署ニテ之ヲ定ムヘシ

又此官署ハ各區ニ係ル分等表ヲ揭示シ且選舉人ヲ選ムヘキ場所
 ヲ定メ且其選舉ヲ總轄スル選舉長并ニ故障アリシハ其長ヲ代理
 スヘキ者ヲ命スヘシ

其分等表ヲ改正スルコトニ付テハ第十五條ノ規則ニ從フヘシ

例ヘハイロハノ順序ヲ書キ夫ヨリ最高ノ稅額ヲ拂フ者ヨリ順序
 ニ從テ各人ノ稅高ヲ記載シ之ヲ揭示ス是レ則區民表ナリ各人ノ
 稅高ノ總數ヲ三ニ因テ割リ得タル數ヲ最高稅ヲ拂フヘキ者ニ比
 準シ其數ニ充ル者ヲ一等トシ其次ノ稅ヲ拂フヘキ者ニ比準シ其
 數ニ充ル者ヲ二等トシ其次ヲ三等トスルカ如シ是レ則分等表ナ
 リ等級ト等級ノ間ニ同等ノ稅額ヲ拂フ者アリテ兩等ニ分ツヘキ
 片ハ其氏ノイロハノ順序ニ從テ等級ヲ定ムヘシ若シ同氏ナル片
 ニハ抽籤ヲ以テ定ムヘシ(此三等ニ分ツコトノ方法ハ「グナイス」ト
 氏ハ甚タ可ナリトスレモ「ビスマルク」氏ハ非トセリ其他之ヲ不
 公平トスル者アリ例ヘハ「クルップ」ノ住居スル地方ニテハ獨リ
 ニテ一等ニ居リ其他ノ地方ニテハ一等ニ入ルヘキ者ナレモ「ク

ルツプノ地方ニテハ二等三等ニ入ルカ如シ又學力アリ若クハ國家ニカヲ盡ス者ト雖モ其稅ヲ拂ハサルモ其上級ニ入ルコヲ得サルノ類故ニ金高ヲ以テ等級ヲ分ツコトヲ不公平トセリ

第十七條 選舉ノ期日ハ內務卿ヨリ之ヲ定ムヘシ

第十八條 選舉人ハ各等毎ニ小選舉區内ニ於テ總區民ノ投票權ヲ有スル者ヨリ等級ニ拘ハラズ選舉スヘシ

選舉人ノ選舉ハ議院解散ノ場合ノ外ハ選舉期限内其効ヲ有スヘシ但議員補缺選舉ノ場合ニ於テハ止タ期限内死スルカ或ハ小選舉區ヨリシテ他ニ移轉スルカ又ハ其他辭退シタル選舉人ヲ其代リニ新タニ選舉スヘキコトハ勿論ナリ

第十九條 區民ハ地方慣例ノ公告ヲ以テ選舉會ニ召集スヘシ

第二十條 選舉長ハ選舉區ノ區民ヨリシテ書記一人及ヒ三人ヨリ六人マテノ輔佐官(是等ヲ合シタル者ヲ選舉官トス)ヲ命シ握手シテ誓約ノ代リト爲サシムヘシ

第二十一條 選舉ハ言語ヲ以テ每等其投票ヲ多數ニ因テ爲スヘシ

第二十三條 第一選舉ニ於テ多數ヲ得サルモ小選舉ヲ爲スヘシ

第二十八條 議員ヲ選舉スル期日ハ內務卿ヨリ之ヲ定ムヘシ

第二十九條 各普魯西人ノ滿三十歳ニシテ公權ヲ有シ一年間普魯西國民權ヲ得タル者ハ議員ニ選ハル、コトヲ得

第三十條 議員ノ選舉ハ言語ヲ以テ其投票ヲ爲スヘシ

其選舉ハ多數ニ因テ定ムヘシ第一選舉ニテ多數ヲ得サルハ小選舉ヲ爲スヘシ

第七十三條 下院ノ選舉期限ハ三年ナリトス

改進黨ハ毎ニ期限ヲ短縮セント欲シ舊守黨ハ毎ニ長延ニセント欲ス則チ其中等ヲ取テ三年トス其三年トハ例ハ千八百七十八年ノ三月一日ニ議員ニ選ハレタル者ハ千八百八十一年ノ三月一日ニ自カラ議員タルノ性質ヲ失フナリ故ニ全國中同一ノ期日ニ選舉ヲ爲サシムルナリ

第七十四條 各普魯西人ノ滿三十歳ニシテ公權ヲ有シ已ニ三年間

(現今ハ一年ナリ)普魯西國民權ヲ有スル者ハ下院ノ議員ニ選ハル、コヲ得

會計検査院長及ヒ其官吏ハ兩院ノ議員タルコヲ得ス

選舉規則第二十九條ト異ナル所ハ會計検査院ノ長及ヒ其官吏ハ兩院ノ議員タルコヲ得サルト三年トアルヲ一年國民權ヲ有スレハ議員タルヲ得ル權アルトナリ従前ハ何人ニテモ議員ト爲ルヲ得レト千八百七十二年ニ規則ヲ發シテ會計検査官吏ノ取除ヲ爲シタリ其趣意ハ検査官ハ全國ノ會計ノ検査ヲ掌トレハ聊モ其黨派ニ關係セシメサルナリ

第七十五條 下院ノ議員ハ選舉期限ノ滿チタル後ハ新タニ選舉スヘシ又下院ヲ解散シタル場合ニ於テモ亦同シ以上ノ場合ニ於テハ是迄ノ議員ハ更ラニ選ハル、コヲ得

下院ノ議員ハ選舉期限ノ滿タル後新議員ヲ選フニ付テハ其期日

ヲ定メス然レモ本條ノ意ニ因テ見レハ選舉期限ノ滿ル前ニハ新
タニ選舉スルコトヲ得サルト期限ノ滿タルキハ直ニ選舉スヘキコ
ハ明カナリ解散ノ場合ニ於テハ第五十一條ニ掲クル期限内ニ新
選舉ヲ爲スヘシ議員解散ノ場合ニ於テ新タニ選舉セラレタル者
ハ舊議員ノ代リニ出タル者ニシテ舊議員ノ期限ヲ引繼クヘキ者
ナリト云フ者アリ或ハ新議員ハ新タニ三年ノ期限ヲ以テ選ハレ
タリト云フ者アリ然レモ今日ハ後說ヲ以テ輿論トセリ

第七十六條 普魯西王國ノ兩議院ハ國王ヨリ通常毎年十一月初旬ヨ
リ翌年一月中旬マテノ時間ニ召集セラルヘシ但臨時召集スルルハ

此限ニ在ラス

千八百五十五年ニ如此稱セリ
舊條ニテハ兩院ハ(バイデホイゼル)ラスランドターゲスデルモ

ナルヒ)毎年十一月中ニ之ヲ開クヘシ且事務ノ繁簡ニ因リ必
用ナル毎トニ之ヲ開クコアリトアリタレモ千八百五十七年五月
十八日ノ法律ヲ以テ本條ノ如ク改正セリ十一月ヨリ一月マテト
定メタルモノハ會計豫算年度ハ四月一日ヨリ翌年四月一日マテ
ニ定ムレハ其前ニ會計豫算表ノ決議ヲ爲サシムルカ爲メナリ
國王ヨリ召集スルニ非スシテ議員ノ隨意ニ集會シタル決議ハ憲
法ニ背キタル者ナレハ其効ナシ

國王ノ召集ト雖モ通常會ハ必ス其期限内ニ召集セサレハ其効ナ
シ召集ノ場所ハ憲法ニ定メナケレハ國王ノ指定スル所ニ召集ス
ヘシ(實際ハ伯林ニ召集スルコナリ)召集ハ各議員ニ廻文ヲ以テ
スルニ非スシテ布告ヲ發シテ召集スルナリ若シ國王ノ幼年ノキ

ハ攝政ヨリ之ヲ召集ス若シ攝政ノ定マラサルハ内閣ヨリ召集スヘシ

第七十七條 議院ノ開閉ハ國王自カラ又ハ國王ヨリ命シタル卿ヨリ

兩院議員ヲ合衆シタル席ニ於テ之ヲ爲スヘシ

兩議員ハ同時ニ召集及ヒ開閉延會スヘシ

下院ヲ解散シタルハ同時ニ上院ヲ延會スヘシ

延會トハ開設時間ニ期限ヲ定メテ決議ヲ中止スルモノユヘ再ヒ

召集セストモ其期限ニハ自カラ集會シテ以前ノ議事ヲ繼續スヘ

シ閉院トハ集會期限ノ終リタルハ閉ツルモノナレハ再ヒ開ク

ハ新タニ召集スヘク又新案ニ非サレハ議事ニ付セス則チ延會

ト閉院トノ異ル所ナリ

第七十八條 各議院ハ其議員ノ選舉ノ正否ヲ檢査シ且之ヲ裁定ス又

各議院ハ職務章程ニ因テ其事務及ヒ懲戒ヲ定メ且議長副議長書記

ヲ選ムヘシ

普國ニテハ議員ノ選舉ノ正否ハ全ク議院ニ委シ政府ハ少シモ之

レニ關涉セサルコニ爲セリ然レモ是レハ甚タ不可ナリ何トナレ

ハ議院ニテ其檢査ヲ爲スハ大ニ黨派ノ關係ヲ生シ自カラ不公

平ナルコニ至レハ上等裁判所ニテ之ヲ爲スヲ可トス(獨逸議院

モ亦同シ然レモ郡規則ニ因レハ郡會ニテ決スルコトハ故障ヲ爲ス

ヲ得レハ算カニ勝レリ)

職務章程トハ議院ノ事務ヲ定メタルモノニシテ懲戒モ之ニ掲ケ

リ其懲戒ハ英國トハ大ニ異ニシテ簡略ナリ止タ注意スヘシト呼

ハルコヲ三度ナスモ仍ホ從ハサルルハ其演説ヲ差止ルノミ或ル國ニ於テハ國王ヨリ議長ヲ命スル所アレトモ普國ニ於テハ矢張議員ヨリ選舉セシメ政府ハ之ニ立入ラス

議長副議長書記ハ每會ノ始メニ之ヲ選ムヘシ

官員ハ議員トシテ議場ニ出席スルニハ休暇ノ願ヲ要セス

官員ヲ議員ニ選ミ休暇ノ願ヲ長官ニ乞フヘキモノトスルルハ官員ヲ議員ニ選ムヘキ効ナシ何トナレハ長官ヨリ之ヲ差止メラレタルルハ議院ニ出ルコトヲ得サレハナリ(千八百六十年代ニ憲法ニ付争ヒノ起リタルル裁判官ヨリ下院ノ議員ニ選ハレタル者甚タ多クシテ何レモ自由黨ナリシナリ其時ノ長官ハ休暇願ハ固ヨリ求メサレトモ代理人ノ費用ヲ其俸給ヨリ引去レリ之レニ付キ政

府ヲ相手取テ訴訟ヲ起セシ者アリ然レトモ上等裁判所ニテ裁判官ノ方カ敗訴トナリタリ是則黨派ニテ法律ヲ遵奉セス自由ノ説ヲ立テサリシナリ其判決ハ後世ノ笑トナリ政府モ其非ナルコトヲ悟リ其後布告ヲ發シテ代理費用ヲ取立サルコト爲セリ千八百六十九年十月廿四日ノ内閣ノ決議ニ因テ政府直接官吏ノ代理費用ハ國庫ヨリ支給セリ)

議員ノ俸給ヲ受クル官吏ト爲ルカ又ハ上官又ハ多キ俸給ヲ受クル官ニ轉シタルルハ直ニ議員ノ性質ヲ失フヘシ止々新選舉ニ因テ再ヒ選ハレタルルハ更ニ議員ト爲ルコトヲ得何人タリト雖モ同時ニ兩院ノ議員ト爲ルコトヲ得ス

議員ノ性質ヲ失フ所以ハ政府カ其黨派ヲ増サンカ爲メニ其者ヲ

私スルノ疑ナカラシメンカ爲メナリ一人ニシテ兩議院議員ト爲ルキハ兩院ヲ區別シタル効ナケレハナリ

第七十九條 兩院ノ會議ハ傍聽ヲ許スヘシ然レモ各議院ハ議長又ハ議員十人ノ發議ニ因リ傍聽ヲ禁シ其席ニ於テ先ツ傍聽ヲ禁スヘキヤ否ヲ決議スヘシ

人ノ名譽ニ關スルコト例ヘハ國王ノ愚鈍ニシテ攝政ヲ設クヘキ場合ニハ傍聽ヲ禁スルヲ得其發議ハ傍聽ヲ禁シタル席ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第八十條 各議院ハ法律ニ定メタル議員ノ過半数出席スルニ非サレハ決議ヲ爲スコトヲ得ス各議院ノ決議ハ過半数ヲ以テ可否ヲ決スヘシ但職務章程ニ因テ議院中ノ選舉ニ格外ヲ定メタルキハ此限ニ在

ラス

下院ハ現今ハ四百三十三人ノ議員ナレハ少クモ二百十七人出席セサレハ決議ヲ爲スコトヲ得ス上院ハ選ハレテ議員ト爲ル者ニ非ス自カラ議員ト爲ルノ權ヲ有シ且旅費日當ヲ受ケサルカ爲メニ自カラ出席スル者少クシテ過半数ヲ得ルコト甚々稀ナレハ千八百五十五年五月三十日ニ法律ヲ發シテ上院ノ議員ハ少クモ六十人出席セサレハ決議ヲ爲スコト能ハスト定メリ故ニ本條ハ現今ハ上院ニハ適用ス可カラス

議院中ノ選舉トハ委員ヲ選フノ類此場合ニハ或ハ過半数ニ至ラストモ決議スルコトヲ得ヘシト格外ヲ定ムルヲ得レモ現今ハ其格外ナシ

第八十一條 各議院ハ國王ニ建言スルノ權アリ

建言トハ各議院ヨリシテ立法ノコ又ハ一般ノ政務ニ付キ不十分ナルコアルト認ムルキ建言スルト又ハ諸省ノ卿ノ行政ニ付キ故障ヲ國王ニ申立ルコナリ此權ハ今日ハ殆ントナキカ如シ英國ニ於テハ兩議院ヲ開クキニ之ヲ王ヨリ返答ヲ爲セハ其効アレヒ普國ニ於テハ之ヲ返答スルト否ハ國王ノ權ニアレハ其効ナシ何人ニテモ自ラ各議院ニ行テ歎願書又ハ建白書ヲ差出スコヲ得ス此事ハ佛國ノ大變革ノ時ニ人民カ各議院ニ迫テ歎願セシキニ之カ爲メ脅迫セラレタリ其弊アラシクコヲ恐レテ本條ハ自ラ行クコヲ禁セリ止タ書面ヲ送ルコヲ得ルノミ

各議院ハ受取りタル書面ヲ卿ニ廻送シ其故障ニ付キ明細ヲ求ムル

コヲ得

第三十二條ニ從ヘハ何人ト雖ヒ歎願ヲ爲スノ權アリ然レヒ歎願ヲ爲スニハ必ス其順序ヲ經テ爲スヘシ順序ヲ經テ歎願シタル者ハ議院ニ於テ歎願委員ヲシテ之ヲ檢査セシメ其順序ヲ經テ最終ニ來リタルコノ明カナルキハ之ヲ採用シ議事ニ付スヘシ未タ順序ヲ經サルモノナレハ其順序ヲ指圖スヘシ又其事柄ニ因テハ卿ニ廻シテ詳細ヲ問合スコヲ得其時ハ卿ハ答辨ヲ拒ムコヲ得ス(建白ハ返答スルニ及ハス歎願ハ返答スヘシ)

第八十二條 各議院ハ事實ヲ明カニセンカ爲メ委員ヲ命シテ其事實ヲ審查セシムルノ權アリ

此權ハ餘儀ナキ場合ニ於テ稀ニ用フルモノニシテ例ヘハ參政ヲ

訴フル場合又ハ議員選舉ニ政府ノ關係ヲ爲シタル場合ニ議員中ヨリ委員ヲ命シテ之ヲ審査セシムルナリ此場合ニ於テ議院ハ諸省ノ卿ニ依頼スルコトナクシテ直チニ裁判官又ハ行政官ニ命シテ證據書類ヲ差出サシメ證據人ヲ聞糺サシムルコトヲ得ルナリ其時ハ行政官又ハ裁判官ニテ之ヲ拒ムコトヲ得ス若シ諸省ノ卿ニ依頼シテ事實ヲ検査セシムルキハ本條ノ趣意ヲ貫カサルノミナラス本條ノ由テ來タル白耳義英國ノ憲法ニモ背クモノナリ普國ニテ憲法ニ付キ爭アリシキ卿ハ必ス卿ニ依頼スヘク主張セリ而ルニ本條ヲ實行シタルキハ憲法設立以來唯タ一度アルノミ

第八十三條 兩院ノ議員ハ全國人民ノ代議士ナリ議員ハ自己ノ真心ヲ以テ投票ヲ爲シ委任ノ爲メニ束縛セラル、コナシ

本條ハ如何ナル國ト雖モ立憲政体ノ國ニ於テハ必ス設ケタルモノナリ是レ則古ノ身分ニ因テ代議士ヲ出シタルキノ政体ニ著シク異ナル所ナリ古ノ政体ノ代議士ハ代理シタル身分ノ利害ノミニ關セリ例ヘハ貴族ハ貴族ノミノ利害ヲ圖リ平民ハ平民ノミノ利害ヲ圖ルカ如キナレモ立憲政体ノ代議士ハ之レトハ異ナリテ全國人民ノ利害ヲ圖ル者ナリ例ヘハ伯林ヨリ出ル代議士ニテモ特リ伯林ノミノ利害ヲ圖ラサルカ如シ又議員ノ委任ハ民法上ノ委任トハ全ク性質ヲ異ニシ民法上ノ委任ナレハ委任セラレタルカ如ク所置ヲ爲スヘキモノナレモ議員ハ聊モ委任セラレタルコトニ束縛セラル、ニ及ハス已レノ信スル所ニ從テ投票ヲ爲スナリ例ヘハ租稅ヲ増スコトニ付キ可ト決ス

ヘキ委任ヲ受ケタレト後チ議院ニ於テ否ト決ス可シト信シ否ト決シタルモ法律ニ於テ毫モ其責ヲ負フコトナシ然ナカラ道徳上ニ於テ委任ヲ辭スルカ如キハ法律ニ於テ之ヲ制セス近來佛國ニ於テ民權黨ニ於テ議員ハ必ス委任ニ從テ投票スヘキモノナリト主張セリ然レト立憲政体ノ王國ニ於テハ此說ハ甚ダ適當ナラストス共和政体ニ於テハ其說ハ理ナキニ非ス何トナレハ國家ノ主權ハ人民ノ手ニ在レハ其人民ノ委任ヲ受ケタル者ハ其委任ノ如ク投票スヘシトスルモ可ナリ

第八十四條 議員ハ固ヨリ議院ニ於テ爲シタル投票ノ責ヲ負ハス然レト其意見ニ付テハ議院内ニ於テノミ唯タ事務章程ニ(第七十八條)從テ其責ヲ負フヘシ

議員ハ勿論法律ニ從フヘシト雖モ十分ニ自己ノ意見ヲ陳述スルコトヲ得ル特權ヲ與フヘシ則自由發言ノ權ト裁判所ヨリ捕縛スルコトヲ得サルトナリ然レト事務章程ニ從テハ人ノ名譽ヲ害スルカ如キ發言ヲ爲シタルトハ懲戒ヲ加フルコトヲ得ルナリ但此懲戒ハ普國ニ於テハ事務章程ニ於テ微々タル懲戒ニシテ十分ナルコトナシ六十年代ニ憲法ノ爭アリシト議員ノ議院内ニ於テ發言シタルコトニ付キ通常裁判所ニ訴ヘシコトアレト上等裁判所ニ於テ之ヲ却下スルコトニ決セリ其後上等裁判所ハ政府ノ權ニ壓制セラレテ裁判所ニテ裁判スルコトニ說ヲ變セリ之カ爲メ上等裁判所ハ其名譽ヲ失ヒ今日上等裁判所ヲ「ライフチヒ」ニ設ケタル所以モ自カラ原因アルコトナリ憲法ノ爭アリシ時或議員カ議院ニ於テ意見トハ

自己ノ考ヘテ言フモノニシテ決シテ其言語ヲ罰スヘキモノニ非
 ス唯タ事實ヲ陳述スルハ例ヘハ人ニ盜ヲ爲シタリト云フカ如キ
 事實ヲ陳述スルニ至テハ勿論罰スヘキハ當然ナリト云ヘリ獨乙
 刑法第十一條ニ明カニ意見ト記セスシテ發言ト記シ思考ト事實
 陳述ノ意義トヲ包括セシメタリ故ニ今日ハ議院ニ於テ陳述シタ
 ルコトハ通常裁判所ヨリ手ヲ入ル、コト能ハサルコト爲レリ
 發言ノ自由ハ議員ニ對シテハ必ス之ヲ防護スヘキモノナレド或
 ハ此權ヲ濫用シテ國王人民ヲ侮辱シ易ケレハ議院ニ於テハ之ヲ
 罰スヘキノ權ナカルヘカラス則チ事務章程アル所以ナリ然レド
 普國ノ事務章程ハ止々注意スヘシト呼フノミニテ罰ナケレハ其
 効ナシ英佛ノ如キハ其罰ヲ以テ之ヲ懲戒スルニ足ルモノアリ

又獨逸刑法第十二條ニ發言ノ自由ヲ防護スル法アリ

參照 獨乙刑法第十一條獨乙連邦ノ議員ハ議院ニ於テ爲シタル
 投票又ハ職務上ノ發言ノ爲メ議院外ニ於テ其責ヲ負擔スルニ
 及ハス第十二條獨乙連邦ノ議院ノ議事ノ確實ナル報告ノ爲メ
 其責ヲ負フコトナシ

議員ハ議院ノ許可ナケレハ開院中ハ犯罪ノ爲メ審問又ハ拘留セラ
 ル、コトナカルヘシ但現場又ハ犯罪ノ翌日ニ捕縛スルハ此限ニ在ラ
 ス

此項ノ趣意ハ議員ノ説カ政府ニ抵抗スルカ爲メニ(國事犯ノ場
 合ノ類)捕縛審問スルコトヲ禁シタルナリ若シ捕縛セントスルニ
 ハ必ス前以テ議院ノ許可ヲ得ヘシ通常議院ニ於テ國事犯ノ爲メ

ナレハ許可ヲ爲サス常事犯ナルハ許可スルコアリ
又負債ノ爲メニ捕縛スル時モ亦前項同様ノ許可ヲ要ス債主ノ爲
メ直ニ負債者ヲ捕縛セシムルハ國家ノ大ナル事件ヲ忽カセニ
スルノ恐レアレハ必ス許可ヲ得サレハ捕縛スルコヲ得セシメス
然レモ現今ハ負債ニ付キ捕縛スルコナシ

議員ニ對スル一切ノ刑事裁判及ヒ審問ノ爲メノ拘留又ハ民事ニ關
スル拘留ハ開院中ハ其議院ノ求メアルハ之ヲ停止スヘシ

此例ハ屢々社會黨ニ屬スル議員ノ審問拘留ナル者ヲ下院ヨリ求
メテ議院ニ出セシコアリ其他刑法第百五條第百六條ニ議員ヲ防
護スル箇條アリ

第八十五條 下院ノ議員ハ政府出納局ヨリシテ法律ニ從テ旅費日當

ヲ受クヘシ其權ヲ放棄ス可カラス

下院ヲ開キ可否ヲ決スルコヲ得ル議員ノ數ヲ召集スル爲メニハ
便利ナル規則ナリ旅費日當ハ必ス之ヲ受取ルヘシ

千八百七十六年七月廿四日ノ議員旅費日當規則

第一條 下院議員ノ旅費日當ハ左ノ如ク計算スヘシ

一 旅費荷物運送賃ヲ包蓄ス

一 汽車汽船ノ旅行ニ於テハ一「キロメートル」毎ニ十三「ヘニ

ヒ」出立到着毎ニ三「マルク」ツ、

二 汽車汽船ニ非サル旅行ニ於テハ一「キロメートル」毎ニ六

十「ヘニヒ」

二 日當ハ一日ニ付十五「マルク」

第二條旅費計算ニ付テハ政府官吏ノ規則ヲ適用スヘシ

第五普魯西國憲法三

第六編 裁判權

此編ハ 第八十六條ヨリ第九十六條マテ 獨逸法律ニ因テ其文体ノ變リタル所及ヒ改正セラレタル所多ケレハ其法律ヲ茲ニ掲クルヨ必要トス

第八十六條 裁判權ハ國王ノ名義ヲ以テ止タ法律ヲ遵奉スヘキ獨立ノ裁判所ニ於テ之ヲ行フヘシ

判決ハ國王ノ名義ヲ以テ之ヲ爲シ且執行スヘシ

第八十七條 裁判官ハ國王自カラ又ハ其名義ヲ以テ終身之ヲ命スヘシ裁判官ハ法律ニ定メタル事由ニ因リ裁判ヲ決ヲ以テ其職ヲ免シ又ハ一時休職セシムルヲ得法律ニ因ラサル職務停止及ヒ自カラ欲セサル轉職若クハ退隱ハ法律ニ定メタル事由及ヒ手續ニ因リ裁

判官ノ裁定ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ルノミ

裁判所ノ編制又ハ其區畫ヲ變更シタルニ因リ必要ナル轉職ニハ此

規則ヲ適用ス可カラス千八百五十一年五月七日ノ
裁判官懲戒法ヲ見ルヘシ

(イ)第八十七條 普魯西國及ヒ他ノ連邦ノ爲メ共通裁判所ヲ編制ス

ルニハ第八十六條及ヒ前條第一項ノ規則ニ抵觸スルモ妨ケナシ八千

百七十九年二月
十九日ノ法律

第八十八條 裁判官ハ後來他ノ俸給ヲ受クル政府ノ官吏タルコトヲ得ス

但法律ヲ發シテ他ノ官吏ニ任シタル者ハ此限ニ在ラス本條ハ千八
百五十六年

四月三十日ノ法律
ヲ以テ廢止セリ

第八十九條 裁判所ノ編制ハ法律千八百七十七年一月廿七日ノ
獨逸裁判所編制法是レナリヲ發

シテ之ヲ定ムヘシ

第九十條 裁判官ハ法律ニ定メタル學力ヲ有スル者ニ非サレハ之ヲ

任スルコトヲ得ス

第九十一條 特別事件ノ爲メニ設クル裁判所就中商法裁判所營業裁

判所ハ法律ヲ發シテ之ヲ要スル地ニ設クヘシ

其裁判所ノ編制及ヒ權限裁判手續裁判官ノ任命其特別ノ權利義務

職務年限ハ法律ヲ發シテ之ヲ定ムヘシ

第九十二條 普魯西國ニ於テハ止々一箇ノ上等裁判所ヲ設クヘシ

第九十三條 民事及ヒ刑事裁判所ノ裁判ハ之ヲ公行スヘシ但裁判所

ニ於テ秩序又ハ風俗ヲ害スヘシト認メタルモノハ其裁定ヲ公告シ

テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得獨逸裁判所編制法第百七十條第百七十一條
第百七十二條第百七十三條ヲ參看スヘシ

其他ノ場合ニ於テハ止々法律ニ因テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第九十四條 重罪ハ陪審ニ因テ有罪無罪ヲ判決スヘシ但議員ノ承諾ヲ經テ特ニ定メタルモノハ格別ナリトス陪審裁判所ノ編制ハ法律ヲ以テ定ムヘシ同裁判所編制法第八十條ヲ見ルヘシ

第九十五條 法律ヲ發シテ特別裁判所ヲ設ケ國事犯及ヒ國家ノ安寧ニ關スル重罪ヲ裁判セシムルコトヲ得同編制法第三百三十六條第一及第三百八十條以下ヲ見ルヘシ

第九十六條 裁判所及ヒ行政官署ノ權限ハ法律ヲ發シテ之ヲ定ムヘシ其權限爭ハ法律ヲ以テ定メタル裁判所ニ於テ判決スヘシ千八百九年八月十一日ノ裁判所及ヒ行政官署トノ間ニ起リタル權限爭規則千八百七十七年一月廿七日ノ裁判編制法第十七條參看

千八百七十七年一月廿七日裁判所編制法

第一編 裁判官

第一條 裁判權ハ只々法律ニ從ヒ獨立シタル裁判所ニ於テ之ヲ

行フヘシ

裁判權ニ付テハ二ノ區別アリ一ハ訴訟事件ヲ裁判スル權ニハ裁判行政ナリ一ハ民事刑事ニハ裁判所ノ組立事務章程及ヒ裁判官ノ監督トナリ裁判ハ古ヘハ普國ニ於テ國王自カラ爲セリ今日ハ止々法律ヲ遵奉スヘキ裁判官ニ因テ爲スナリ故ニ今日ハ國王又ハ行政官ヨリ裁判官ニ指揮スルモ裁判官ハ其指揮ニ從フニ及ハス且行政官ニテ爲シタル裁判ハ毫モ其効ナシ憲法第八十六條ニモ其趣意ハ明カニ顯ハレリ則憲法ニ從ヘハ裁判權ハ國王ノ名義ヲ以テ之ヲ行ヒ其判決モ亦國王ノ名義ヲ以テ執行スヘシ

第二條 裁判官ト爲ルニハ二ノ試験ヲ要スヘシ第一ノ試験ヲ爲

ス前ニ三年間大學校ニテ法律學ヲ學フヘシ其期限中少クモ一年半ハ獨逸大學校ニテ學フヘシ

第一第二試験ノ間ニハ三年ノ時間ノ猶豫アルヘシ其時間ハ裁判所及ヒ代言人ニ付テ其事務ヲ見習フヘシ又其間ニ檢事ノ事務ヲ見習フコトヲ得

各連邦ニ於テハ大學校ニテ學フヘキ時間又ハ見習ノ時間ヲ之ヨリ長クスルコトヲ得

第一ノ試験ハ學問上ノ試験ニシテ第二ノ試験ハ實際上ノ試験ナリ此法律ニ於テハ最モ短カキ時間ヲ定メタルモノナレハ各連邦ハ法律ヲ發シテ之ヨリ長キ時間ヲ定ムルコトヲ得例ハ普國ニ於テハ其見習時間ヲ四年ト定メタルカ如シ

第四條 其他獨逸大學校ノ法律學正博士ハ裁判官タルコトヲ得

正博士ノ外ニ副大博士アリ之レハ裁判官ノ性質ヲ有セス

第二條ノ二ノ試験ノ外ニ裁判官ト爲ルヲ得ヘキモノハ止テ正大博士アルノミ

第六條 裁判官ノ任命ハ終身ナリトス

終身官ノ任命ハ第一其職務ヲ公平ニ守ラシムルノ保證ナリ何人カ任スルヤハ此法律ニ掲ケスト雖モ普國憲法ニハ第八十七條ニ國王ヨリ任スヘシトアリ

第七條 裁判官ハ其職務ノ爲メ一定ノ俸給ヲ受クレハ手数料ヲ受クルコトヲ許サス

是レ則其職務ヲ公平ニ爲サシムル第二ノ保證ナリ其俸給ノ高ハ法律ヲ以テ之ヲ定メ且漸々増給スヘシ決シテ司法卿ノ隨意

ニ之ヲ増減スルコトヲ得ス

第八條 裁判官ハ其意ニ反シテハ止々法律ニ定ムル理由方法ヲ以テ裁判ヲ經タル上一時又ハ永久免職又ハ他ノ裁判所ニ轉スルカ又ハ退隱セシムルヲ得ルノミ

此事ハ又々第三ノ保證ト爲ル者ナリ本條ハ所謂裁判官ヲ免官スルコト能ハストスル所ナリ司法卿ヨリ隨意ニ裁判官ヲ免シ又ハ他所ニ轉シ又ハ退隱セシムルコトヲ得ス止々法律ニ從テ裁判所ニテ裁判ヲ受ケタル上ニ非サレハ能ハサルナリ普國ニ於テハ初審裁判所及ヒ控訴裁判所ノ裁判官ハ控訴裁判所ニテ初審裁判ヲ受ケ「カンメルゲリヒト」ニ於テ別段ノ裁判官十五人ヨリ組立タル懲戒裁判掛リニテ控訴裁判ヲ受クルナリ

法律ニ因テ一時職務ヲ停止スルコトハ前項ノ限ニ在ラス

例ヘハ裁判官ノ重罪ヲ犯シタルト其審問中法律ニ因テ自カラ停止セラル、カ如シ

裁判所編制又ハ其管轄ヲ變スルトハ裁判官ノ意ニ反スルモ司法省ヨリ他ノ裁判所ニ轉シ又ハ俸給ノ全額ヲ給シテ一時休職セシムルコトヲ得

裁判所編制又ハ管轄區ヲ變スルコトハ必ス法律ニ因テ爲スヘシ此時ハ假令裁判官ノ不同意ト雖モ司法省ヨリ轉職休職セシムルヲ得獨逸ニテハ千八百七十九年ニ裁判所編制法ヲ改革シタルカ爲メ普國司法卿ニテ其後五年間ハ裁判官ヲ轉職休職セシムル權ヲ得ルカ如シ

普國ノ憲法第八十九條ニ裁判所ノ編制ハ必ス法律ニ因テ爲スヘシトアリ

第九條 職務上ヨリ生シタル裁判官ノ財産請求權就中俸給休職料退隱料ニ關スル請求權ニ付キ通常裁判所ニ訴へ出ルノ道ヲ塞ク可カラス

是レ則第四ノ保證ト爲ルモノニシテ獨逸法律ニ於テ司法卿ヨリ裁判官ニ對シ財産請求權ヲ壓制シタルルニ通常裁判所ニ訴出ルコトヲ得セシムルナリ

第二編 裁判權限

第十二條 訴訟事件ハ「アンムツゲリヒト」(區裁判所)「ランドグリヒト」(地方裁判所)「ヲ、ベルランドスゲリヒト」(各州ニアル

控訴裁判所)「ライヒスゲリヒト」(大審院)ニ因テ之ヲ裁判スヘシ

「アンムツゲリヒト」及ヒ「ランドグリヒト」ヲ始審裁判所トス普國ニ於テハ伯林ノ「ヲ、ベルランドスゲリヒト」ヲ別段ノ布告ニ因テ之ヲ「カンフルゲリヒト」ト稱シタリ

「アンムツゲリヒト」ト「ランドグリヒト」ハ全ク同一ノ權ヲ有シタルモノニシテ裁判官モ同等ノ權アリ場合ニ因テハ「アンムツゲリヒト」ヨリ「ランドグリヒト」ニ控訴ト爲リテ行クコトアリ「アンムツゲリヒト」ハ一人ノ裁判官「ランドグリヒト」ハ三人ノ裁判官ナリ止々其組立ノ異ルノミ(控訴裁判所裁判官ノ下ニ十三ノ等級ノ俸給ヲ分テリ八百「ターレ」ヨリ二千「ターレ」マテアリ)

第十五條 裁判所ハ所ハ國家ノ裁判所ナリトス
裁判權ト云フ者ハ國家主權ノ一ナレハ國家ノ裁判所ニテ之ヲ
掌ルヘシ

私有裁判權ハ廢止ス其裁判權ハ之ヲ行ヒシ連邦ノ裁判所ニテ之
ヲ行フヘシ裁判官ヲ申立ルコトハ廢止スヘシ

私有裁判權トハ貴族ニテ有セシ者ナリ人ヲ申立ルトハ裁判官
ヲ命スルハ貴族ヨリ國王ニ裁判官タルヘキ人名ヲ申立テシナ
リ

僧侶ニテ凡俗ノ事件ニ付キ爲シタル裁判ハ凡俗ニ對シ其効ナシ
トス就中婚姻又ハ婚姻ノ契約ニ付テハ其効ナキモノナリ

第十七條ハ裁判所ト行政官トノ權限爭ヒヲ定メタルモノナリ

此法律ノ發行前ヨリ各連邦ニ於テ佛蘭西ノ法律ニ倣ヒ行政官
ト裁判官トヨリ組立タル權限爭ヒ裁判所ヲ設ケタリ其趣意ハ
裁判官ハ行政ニ乏シキト成ルヘク行政官ノ事務ヲ取込ムヲ防
ク爲メナリ然ルニ此法律ニテ全ク權限爭裁判所ヲ廢スルノ趣
意ナリシニ上院ニテ其裁判所ヲ廢スル上ハ此法律ヲ可ト決セ
サル抗論アリ之カ爲メ下院ニ於テモ權限爭裁判所ヲ廢セサル
コトニ決シ各連邦ニ於テ今日仍ホ行ハレリ權限爭裁判所ノ裁判
官ハ半ハ控訴裁判所大審院裁判官半ハ行政官ヨリ成立テ終身
官トセリ其權限爭ニニアリ裁判所モ行政官モ共ニ己レノ權限
ナリト云フ者アリ此場合ハ上等行政官ヨリ訴ヲ起スヘシ又双
方共己レノ權限ニナシト云フ者アリ此場合ハ人民ヨリ訴ヲ起

スヘシ

第十八條 法律ノ原則ニ因レハ何人ト雖モ其地ノ裁判權ニ從フヘキ者ナリ然レモ其内ニ格外ヲ爲ス者アリ則獨逸國ニ在ル外國ノ公使及ヒ屬官若シ獨逸人ナルモ其連邦ノ政府ヨリ裁判權ヲ放棄スト云ハサレハ獨逸ノ法律ヲ以テ處分スヘカラス公使ノ家屬從者モ亦獨逸ノ裁判權ニ屬セス然シナカラ獨逸人ナレハ固ヨリ獨逸ノ裁判權ニ從フヘシ然レモ民法上不動産ニ關スル訴ヘハ假令裁判權ニ屬セサル者ト雖モ獨逸國ノ裁判權ニ從フヘシ又領事ハ獨逸國ノ裁判權ニ從フヘシ止タ政府ノ間ニ條約ヲ結テ特別ノ定メアルモ限リ從ハサルコトヲ得ルナリ

第三編 區裁判所
インシュペリクト

第二十二條 區裁判所ハ裁判官一人ヲ設ク

裁判官數人ヲ設ケタルモ司法省ヨリ其内一人ニ事務ノ監督ヲ委任スヘシ但各裁判官ハ一人ツ、獨立シテ裁判ヲ爲スヘシ

區裁判所ハ本來ハ裁判官一人ヲ以テ裁判セシムルモノトス其裁判官ハ屬官ハ屬官ノ事務ヲ監督スヘシ若シ數人アルモ其内一人ニ其事務ノ監督ヲ司法省ヨリ命スヘシ但裁判官ノ事務ヲ監督セシムルニ非ス數人裁判官アル所ニテハ其事務ヲ分テ擔當スヘシ或ハ地方ニ因テ分チ或ハ事件ノイロハ順序ニ從テ分チ或事件ノ性質ニ從テ分ツ類ナリ其事務ヲ分ツコトハ前年ニ於テ之ヲ爲スヘシ又之ヲ定ムルコトハ地方裁判所ノ本局ニ於テ爲スヘシ本局ニ於テ定ムル理由ハ從前ノ如ク所長ニテ隨意ニ

之ヲ他ノ裁判官ニ割付クルモハ自カラ弊害アレハ之ヲ防クカ
爲メナリ

第二十三條 區裁判所ハ左ニ掲クル民事ヲ裁判ス但事件ノ價格

ニ拘ハラズ地方裁判所ニテ裁判スヘキモノハ此限ニ在ラス

一財産請求事件ノ三百マルク以下ノ者

二事件ノ價格ニ拘ハラズ急速ヲ要スル事件及ヒ原被兩告ノ人ト

爲リヲ知ルコトヲ要スル事件又ハ容易ナル事件

其他區裁判所ハ別段ノ法律ニ因テ後見人及ヒ遺囑物配當又ハ土
地ノ登記書入抵當家資分散ノ事件ヲ擔任スヘシ

第四編 「シヨッフエン」(人民ヨリ選任シタル者)

第二十五條 刑事ヲ裁判スル爲メニハ「シヨッフエン」
裁判所

區裁判所ニ設クヘシ

人民モ裁判ニ加ハル權アリ一ハ「シツール」
陪審裁判所

ヨリハ別ニ有罪無罪ヲ判決シ一ハ「シヨッフエン」
裁判所

裁判官ト共ニ裁判ヲ爲スヘシ

第二十六條 「シヨッフエン」裁判所ハ區裁判官ヲ裁判長ト爲シ

「シヨッフエン」二人ヨリ成ルヘシ

第二十七條 「シヨッフエン」
裁判所

トヲ裁判ス(例ヘハ輕キ者トハ三箇月以下ノ禁獄六百マルク以

下ノ罰金又ハ竊盜ノ贓二十五マルク以下侮辱ノ罪等ヲ云フ)其

他「シヨッフエン」
裁判所

局ヨリ委任シタル刑事ヲ裁判スヘシ其詳細ハ第七十五條ヲ見合

スヘシ(例ハ獨逸刑法第百十三條第百十四條第百十七條ノ一項第百二十條ノ場合ニ於ケル官吏ニ拒抗スル罪ノ類)

第三十條 「シヨツフエン」ハ裁判官ト同一ノ權ヲ以テ裁判ヲ爲

スヘシ止々裁判官ハ「シヨツフエン」裁判所長タルノ異アルノミ

第三十一條 「シヨツフエン」ハ無給ニシテ勤ムル職務トス

「シヨツフエン」ヲ設クルノ手數ハ甚々煩雜ナリトス又政府ノ

關係ヲ爲サ、ルヤウ注意セリ其手數ハ團結長ハ其管下ノ人

民ノ氏名簿ヲ作り之ヲ揭示スヘシ人民ハ之ニ對シ故障ヲ申立

ル^{ヴェルリスガ}ヲ得團結長ハ氏名簿ヲ區裁判所ニ差出スヘシ區裁判所ハ

裁判官一人ト行政官一人ト人民ヨリ出タル委員七人トニテ故

障アル^トハ先ツ其故障ヲ裁定シ而テ一年間ニ必用ナル「シヨ

ツフエン」ノ人員ヲ定ムヘシ區裁判所ニ於テハ抽籤ヲ以テ一年間ニ裁判ニ加ハルヘキ人ノ順序ヲ定ムヘシ

第五編

地方裁判所 伯林ニハ地方裁判所ハ長一人課長十六人裁判官六十三人アリ

第五十八條 地方裁判所ハ所長一人ト局長數人ト裁判官數人ヨ

リ成ルヘシ

第五十九條 地方裁判所ニハ刑事局ト民事局ヲ設クヘシ

第六十條 地方裁判所ハ必用ナル^トハ司法省ヨリ一年ノ期限ヲ

以テ裁判官ヨリ豫審裁判掛ヲ命スル^トアリ

第六十一條 裁判所全體會ニ於テハ所長カ會長ト爲リ諸局ニ於

テハ所長ト局長カ會長ト爲ルヘシ毎年ノ始メニ所長ハ何レノ局

長ト爲ルヘキヤヲ自カラ定ムヘシ其他ノ局長ハ所長ト局長ノ多

數ニ因テ之ヲ分ツヘシ

第六十二條 事務ハ毎年始メニ各課ニ配當シ且其課ノ裁判官及ヒ代理人ヲ定ムヘシ其一年間ハ止々課ノ非常ニ多端ニアルカ又ハ裁判官カ續テ故障アルカ又ハ裁判官ニ變更アルルニ非サレハ其事務ヲ變スルヲ得ス

第六十三條 前條ノ順序ハ本局ニ於テ之ヲ定ムヘシ

本局トハ所長ヲ會長トシ局長全員及ヒ上席ノ裁判官一人ヨリ成ル其決議ハ多數ニテ決スヘシ

古ヘハ司法卿ヨリ之ヲ變更セシトモ今日ハ法律ニテ之ヲ定メタルニヘ政事上ノ黨派カ裁判上ニ消滅セリ

第七十條 地方裁判所ニ於テハ商法局區裁判所ニ屬セサル一切

ノ民事ヲ裁判ス其他其事件ノ價格ノ多少ニ拘ハラヌ民法ト

公法トノ間ニアル事件純粹ノ民事ヲ裁判ス例ヘハ千八百七十年

ヒ役業ヨリ拂フヘキ
稅ニ關スル訴訟ノ類

其價格ノ三百マルク以下ヨリ少キモノト雖モ地方裁判所ニテ

裁判セシムル譯ハ其上告ヲ上等裁判所ヘ出サシムル趣意ナリ

第七十一條 民事局ハ區裁判所ニテ判決シタル控訴ヲ裁判シ且故障ヲ裁定スヘシ

第七十二條 治罪法ニ於テ地方裁判所ト掲ケタル所ハ地方裁判所ノ刑事局ヲ云フ刑事局ハ豫審掛又ハ區裁判所裁判官ノ命令ニ對スル故障及ヒ「シヨツフエンダリヒト」ノ言渡ニ對スル故障ヲ決定スヘシ

第七十三條 刑事局ハ「シヨッフエン」裁判所ニ屬セサル都テノ
輕罪ヲ裁判ス又或ル重罪ヲ裁判ス例ヘハ獨逸刑法第七十六條
第三第二百四十三條第二百四十四條第二百六十條第二百六十一
條第二百六十四條ノ類ナリ

第七十六條 又「シヨッフエン」ノ判決ニ對スル控訴ヲ
裁判スヘシ

第七十七條 各局ハ長一人ト裁判官二人ニテ裁判スヘシ刑事課
ニテハ五人ニテ爲スヘシ但違警罪ノ控訴及ヒ人民ヨリ直ニ訴出
タル事件ハ三人ニテ之ヲ爲スヘシ

第六編 陪審裁判所

第七十九條 地方裁判所ニハ期限ヲ定メ陪審裁判ヲ開クヘシ

第八十條 陪審裁判所ハ地方裁判所又ハ帝國裁判所ニ屬セサル
一切ノ重罪ヲ裁判ス

第八十一條 陪審裁判所ハ長一人裁判官二人陪審官十二人ヨリ
成ル

第八十三條 陪審裁判所ノ長ハ陪審裁判ヲ開ク毎ニ上等地方裁
判所長ヨリ之ヲ命スヘシ

第八十四條 陪審ノ職務ハ無給タルヘシ區裁判所ニ於テ裁判官
ト行政官ト委員七人ヨリ「シヨッフエン」ヲ選定スル外ニ一年間
ニ必用ナル丈ケノ人員ノ三倍ヲ陪審官ト定メ之ヲ地方裁判所ニ
差出スヘシ地方裁判所ニ於テハ裁判所長局長及ヒ裁判官五人ト
ニテ其内ヨリ三分ノ一ヲ選定スヘシ

各陪審裁判ヲ開ク毎ニ二十四日前ニ地方裁判所長ヨリ抽籤ヲ以テ三十人ヲ定メ之ヲ陪審裁判所長ニ差出スヘシ公廷ニ於テハ抽籤ヲ以テ十二人ノ裁判陪審ヲ定ムヘシ其時被告人檢事ヨリ半數ツ、忌避スルコヲ得

第七編 商業事件ノ爲メニ設ケタル局

第百條 司法省ヨリ必用トシタルキハ地方裁判所管轄内ノ爲メ地方裁判所ニ商事局ヲ設クルコヲ得

又場合ニ因リ地方裁判所所在外ノ地方ニ設クルコヲ得

從前ハ佛蘭西ノ法ニ從テ商法裁判所ヲ特別ニ設ケシナレトモ新裁判編制法ニ於テハ止タ必用ナルキニ限り地方裁判所ニ設クルコニ爲セリ例ヘハ伯林「ライン」ハンブリヒ「近邊」ノ如キ商法

ノ盛ナル地方ニ設クルコヲ得普國內ニハ商事局ハ二十六ヶ所アリ

第百一條 商事局ニテハ商業事件及ヒ爲換事件ヲ裁判ス

第百九條 商事局ハ地方裁判所ノ裁判官一人ヲ長トシ商事裁判

官二人ヲ以テ裁判ヲ爲ス

商事裁判ニ付テハ各同等ノ投票權ヲ有セリ

第百十一條 商事裁判官ハ無給トス

第百十二條 商事裁判官ハ商人集會所（コンファレンスカンメル）ノ申立ニ因リ三年ノ期限

ヲ以テ命セラルヘシ一タヒ命セラレタル者ハ又更ニ命セラル、コヲ得

第百十三條 獨逸人ニシテ商人タルカ又ハ株式會社ノ社長トシ

テ商人登記簿ニ登記セラレタル者ノ滿三十歳ニシテ商事局管轄
内ニ住居スル者ハ商事裁判官ニ命セラル、コヲ得

裁判所ノ命令ニ因テ財産管理ノ權ヲ制限セラレタル者ハ商事裁
判官ニ命セラル、コヲ得ス

第百十四條 港埠ニ於テハ又航海ニ熟スル者ヨリ商事裁判官ヲ
命スルコヲ得

第百十五條 商事裁判官ハ其職ニ就ク前ニ誓約ヲ爲スヘシ

第百十六條 商事裁判官ハ其職務ノ年限中ハ裁判官ノ權利義務
ヲ有ス

從來ハ商事裁判所ハ止々商人ノミヲ以テ裁判官トセリ然ルニ
其裁判ハ實際ハ裁判官ニテ爲サスシテ止々書記ニテ之ヲ爲セ

リ此弊ヲ防カン爲メニ今日ハ裁判官ヲ以テ長ト爲スコニ定メ
リ商事裁判官トシヨツフエン及ヒ陪審官ト同シキ所ハ無給
料ニシテ職務ヲ奉スル所ナリ其相互ノ異ナル所ハ「シヨツフ
エン」及ヒ陪審官ハ裁判アル毎ニ期限ヲ定メテ職務ヲ奉スレ
ル商事裁判官ハ期限中ハ國王ヨリ命セラレタル裁判官ニシテ
毎ニ其職務ヲ奉スルナリ商事裁判官ト通常裁判官ト異ル所ハ
裁判官ハ終身ノ期限ヲ以テ命セラルルル商事裁判官ハ無給ニ
シテ期限ヲ定メ命セラル、ナリ其相同シキ所ハ裁判官モ商事
裁判官モ其職務上ノ權利義務ヲ有スル所ナリ商法裁判所ヲ設
クヘキモノナルヤ否ニ付テハ其説紛々タリ羅馬人種ノ國例ヘ
ハ佛國伊國白國等ニ於テハ商事裁判所ヲ設クルコニ決セリ獨

逸國ニ於テモ裁判所編制法ノ草案ニハ商事裁判所ヲ設クル
ニ定メアリタレ^レ議院ニ於テ之ヲ除キ地方裁判所ノ一局トセ
リ商事裁判所ヲ設クヘキヤ又ハ商事局ヲ設クヘキヤノ問題ニ
付テハ一般ニ何レヲ可トシ何レヲ否トスルコト能ハス止タ裁判
官ノ賢明ナルヤ否ト商業ノ如何ニ關シテ之ヲ答フルコトヲ得ル
ノミ賢明ナル裁判官アリテ商法ヲ設ケタル國ニ於テハ寧ろ商
人ヲシテ裁判セシムルヨリハ裁判官ニ委托スルヲ勝レリトス
何トナレハ商人ハ止タ商業事件ノミニ注意シテ法律上ニハ注
目セサレハナリ

第八編 上等地方裁判所

第百十九條 上等地方裁判所ハ所長一人ト局長及ヒ裁判官數人
キーンクリンランド

ヨリ成ルヘシ

第百二十條 上地方裁判所ニハ民事局刑事局ヲ設クヘシ

普國ニハ十三ノ上地方裁判所アリ察長ハ三十四人裁判官ハ
二百三十三人アリ

第百二十一條 事務ヲ各局ニ割付ケ及ヒ其裁判官ヲ定ムルニハ
其本局ニ於テ之ヲ定ムヘシ

地方裁判所ノ本局ノ上地方裁判所ノ本局ト異ル所ハ所長ト
各局長ノ外ニ二人裁判官ノ加ハル所ナリ

第百二十三條 上地方裁判所ハ左ノ上訴ヲ裁判ス上訴ニ三
アリ故障ハ命令ニ控訴事實ヲ檢査シテ裁上告トアリ

一地方裁判所ノ民事ノ裁判判決ニ對スル控訴(區裁判ノ民事ハ

地方裁判所ノ控訴ニ止マリ上告ハナシ

二地方裁判所刑事局ノ控訴ノ判決ニ對スル上告

三地方裁判所刑事局ノ始審裁判ニ對スル上告但各連邦ノ法律ニ

背キタルハニ限ル(此場合ニハ控訴ナシ獨逸ノ法律ニ背キタル

ハノ上告ハ帝國裁判所ニ爲スヘシ)

四地方裁判所民事ノ裁定ニ對スル故障

五刑事始審裁判言渡ニ對スル故障(地方裁判所刑事局ニ屬セサ

ル者)及ヒ地方裁判所刑事局ノ故障ノ言渡及ヒ控訴裁判ノ言

渡ニ對スル故障

上地方裁判所ハ民事ニ付テハ地方裁判所ノ控訴院ト爲ル

アリ又區裁判所ヨリ地方裁判所ヲ經タル故障ノ裁判所トナル

ヘシ刑事ニ付テハ地方裁判所ノ控訴裁判ニ對シ及ヒ地方裁判
所ノ始審裁判ニ對スル上告ヲ裁判ス又「シヨッフエン」裁判所

ヨリ地方裁判所ヲ經タル故障ノ故障裁判ヲ爲ス

普國ニ於テハ地方裁判所ニ於テ刑事ノ始審裁判ヲ爲シタル判

決ニ對スル上告ハ全國均一ナラシメンカ爲メ其上告ハ盡ク伯

林ノ「カンメルグリヒト」ニ爲ストニ定メタリ又後見人又ハ遺

囑物分配等ニ付キ區裁判所ノ處分ニ對シ地方裁判所ニ故障ヲ

申立ルコトヲ得又其故障ノ裁判ニ對シテハ上等地方裁判所ニ故

障ヲ申立ルコトヲ得然レモ其故障ハ止タ伯林「カンメルグリヒ

ト」ニ於テノミ之ヲ裁判スルノ權アリ

第二百二十四條 上等地方裁判所ノ局ニ於テハ局長ヲ合ハセ五人

ノ裁判官ニテ裁判スヘシ

第九編 獨逸裁判所

第二百二十五條 獨逸裁判所ノ所在地ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

現今ハ法律ニ因テ其所在地ヲ「ライプチヒ」ニ定メタリ

第二百二十六條 獨逸裁判所ハ所長一人ト寮長數人ト裁判官數人

ヨリ成ル

第二百二十七條 所長ト寮長ト裁判官ハ上院ノ申立ニ因リ獨逸帝

ヨリ之ヲ命ヘシ

第二百二十八條 第二百二十九條第三百十條第三百三十一條第三百三十

二條第三百三十三條第三百三十四條ハ各寮ニ事務ヲ分チ及ヒ裁判官

ヲ定ムルコトハ本局ニ於テ之ヲ爲スヘシ但本局ハ所長ト寮長ノ外

ニ裁判官四人ヲ加ユヘシ裁判官ノ懲戒權ハ獨リ裁判所ニテ之ヲ
有セリ臨時他ノ裁判官ヲ以テ判決ヲ爲サシムルコトヲ許サス民事
及ヒ刑事寮ヲ設クル數ハ宰相ヨリ之ヲ定ム

第三百三十五條 獨逸裁判所ハ民事ノ事件ニ付左ノ上訴ヲ裁判ス

一 上地方裁判所ノ控訴判決ニ對スル上告

二 地方上等裁判所ノ裁定ニ對スル故障

第三百三十六條 獨逸裁判所ハ刑事ニ付テハ左ノ事件ヲ裁判ス

一 獨逸帝又ハ獨逸國ニ對スル國事犯ノ審問及ヒ終身裁判

是ハ獨逸ノ法律就中憲法ヲ堅固ニスル爲メノ方法ナリ

二 地方裁判所ニ於テ爲シタル判決ニ對スル上告但上地方裁判

所ノ管轄ニ屬セサルモノニ限ル及ヒ陪審裁判ノ判決ニ對スル

上告

第三百三十七條 民事寮ハ他ノ民事寮又ハ民事寮全員會ノ判決ニ違テ裁判ヲ爲サントスルハニハ其事件ヲ民事寮全員會ニ廻送シテ裁判セシムヘシ刑事ニ付テモ亦同シ

全國均一ニ裁判ヲ爲サシムルニハ獨逸裁判所ニ於テ一定ノ原則ヲ定メサル可カラス然レハ獨逸裁判所ノ全員會ニ付スルハ甚々多人數ナレハ民事ハ民事刑事ハ刑事ノ全員會ヲ開テ其說ヲ一定ナラシムルナリ然レハ裁判所ノ事務章程及ヒ懲戒ハ必ス裁判所全員會ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三百三十九條 全員會及ヒ民事又ハ刑事ノ全員會ニハ少クモ所長又ハ寮長ヲ合ハセ各裁判官ノ全員ノ三分ノ二之ニ加ハルヘシ

第四百十條 獨逸裁判所ノ各寮ハ寮長ヲ合ハセ七人ノ裁判官ニテ裁判スヘシ

第十編 檢事

第四百十二條 各裁判所ニハ檢事ヲ置クヘシ

獨逸國ニ於テハ佛國ト異ナリ刑事裁判所ニ限り檢事ヲ置ケリ然レハ民事ト雖ハ離別事件又ハ白痴放蕩等ニ治産ヲ禁スルハ檢事ニテ之ヲ管理セリ

第四百十三條 檢事ノ職務ハ①獨逸裁判所ニ於テハ獨逸檢事長一人ト獨逸檢事一人又ハ數人ニテ行フヘシ②上等地方裁判所地方裁判所陪審裁判所ニ於テハ檢事一人又ハ數人ニテ行フヘシ③區裁判所及ヒ「シヨツフェン」裁判所ニ於テ區檢事一人又ハ數人ニ

テ行フヘシ

普國ニ於テハ上等地方裁判所ニ檢事長一人檢事數人ヲ置キ地

方裁判所ニハ一等檢事一人及ヒ檢事數人ヲ置キ區裁判所ニハ

區檢事數人ヲ置キ此區檢事ハ必スシモ法學者タルコトヲ要セス

就中郷ニ非サル狹小ナル地方ニ於テハ行政官吏ニ命スルコトア

リ

治罪法ニ從ヘハ檢事ハ裁判所ニ對シテハ獨立シタルモノナリ

裁判所ハ檢事ノ告訴ナケレハ裁判ヲ爲スコトヲ得ス都テ告訴ハ

檢事ノ專任トス止タ侮辱輕キ損傷ノ場合ニ限り本人ヨリ直ニ

訴フルコトヲ得ルノミ是故ニ政府ト同一ノ黨派ニ屬スル者ニ限

リ裁判ヲ受クルコトヲ得テ他ノ黨派ニ屬スル者ハ裁判ヲ受クル

コト能ハサルニ似タリ例ヘハ政府ノ自由黨ナルハ舊守黨ノ權

利ハ殆ト保護ヲ受ケサルカ如シ(是レ檢事ハ政府ノ命ニ從フ

ヘキモノナレハナリ)然レモ人民ヨリシテ檢事ニ告訴ヲ求ム

ルコトヲ得若シ檢事ニテ之ヲ拒ミタルハ獨逸裁判所ノ管轄事

件ナレハ該裁判所ニ其他ハ都テ上等地方裁判所ニ故障ヲ申立

ルコトヲ得ルナリ裁判所ニテ其故障ヲ至當ナリト決シタルハ

檢事ヲ強ヒテ訴ヲ起サシムルノ道アリ

英國ハ全ク之ニ反セリ

第四百十四條 檢事ノ管轄區ハ其任セラレタル裁判所ノ管轄區

ニ從テ定ムヘシ

第四百十五條 裁判所ニ檢事數人アルハ其上席檢事ニ附屬セ

普國憲法三

ル檢事ハ其代理人トシテ其事務ヲ行フヘシ此場合ニ於テハ別段ノ委任ヲ要セス

此原則ハ佛國ニ倣ヒ設ケタルモノニシテ檢事ノ職務ヲ合一ニ爲スノ趣意ナリ

第四百十六條 上等地方裁判所及ヒ地方裁判所ノ上席檢事ハ其管轄内ノ裁判所ニ於テ自カラ事務ヲ行ヒ又ハ其裁判所外ノ檢事ニ委任シテ其事務ヲ爲サシムルヲ得

區檢事ハ止々區裁判所及ヒ「シヨツフエン」裁判所ニ於テ其事務ヲ行フコトヲ得

第四百十七條 檢事ハ其職務ニ付キ長官ノ命令ヲ奉スヘシ

檢事ハ裁判官トハ異ナリ行政官ナレハ其長官ノ命令ニ從フヘ

シ是亦檢事ノ職務ヲ合一ニ爲スノ趣意ナリ

第四百十八條 檢事ヲ監督指揮スル權ハ左ノ者ニアリ

一 獨逸檢事長及ヒ獨逸檢事ニ付テハ宰相ニ其權アリ

二 各連邦ノ檢事ニ付テハ其國ノ司法省ニ其權アリ

三 地方上等裁判所及ヒ地方裁判所ノ上席檢事ハ其管轄内ノ檢事ニ付テ其權アリ

第四百十九條 檢事ハ裁判ヲ爲ス官吏ニ非ス然レモ檢事タル者ハ裁判官ノ性質ヲ有スヘシ

檢事ハ裁判官タルノ性質則チ第二ノ試験ヲ爲シタルモノニ非サレハ其職ニ任セラル、コナシト雖モ固ヨリ裁判官ニ非サレハ懲戒及ヒ黜陟ノ事ニ付テハ行政官ノ規則ニ從フヘシ

第一百五十條 獨逸檢察長獨逸檢察ハ上院ノ申立ニ因リ帝ヨリ之ヲ任スヘシ

檢察長檢察ハ何時ナリトモ帝ヨリ法律ニ定メタル休職料ヲ給シテ一時休職セシムルヲ得

普國ニ於テハ檢察ハ國王ヨリ之ヲ任ス休職ニ付テモ亦同

第一百五十一條 檢察ハ其事務ヲ行フニ付テハ裁判所ニ對シ獨立スルモノナリ

第一百五十二條 檢察ハ裁判官ノ事務ヲ行フヲ得ス又裁判官ヲ監督スルヲ得ス

佛國ニ於テハ檢察ニテ裁判官ノ監督ヲ爲セリ獨逸國ニテハ法律ニ於テハ其定メナシト雖モ暗ニ之ヲ爲スノ弊アリシニ因リ

茲ニ其明文ヲ掲ケリ

區檢察ノ任免ハ獨逸法律ニ定メスシテ連邦ノ法律ニ於テ之ヲ定メシムルナリ普國ニ於テハ司法卿ヨリ檢察又ハ見習裁判役

又ハ見習人ノ内ヨリ命スルヲ得但何時ニテモ之ヲ免スルヲ得若シ司法卿ヨリシテ區檢察ヲ命セサルハ檢察長ヨリ縣

令ニ照會シテ區檢察ヲ命スヘシ如何ナル人ニ命スヘキヤハ法律ニ定メナシト雖モ團結長官例ヘハ郷長ヲ檢察ニ任シタルハ必ス其職ヲ受クヘキ義務アルヲ法律ニ定メリ

第一百五十三條 警察官ハ檢察ノ補助官タルヘシ而テ地方裁判所ノ檢察及ヒ其長官ノ命令ニ從フヘシ

如何ナル警察官ニ此規則ヲ適用スヘキヤハ連邦ノ法律ヲ以テ之

ヲ定ムヘシ

此原則ハ佛國ニ倣ヒ司法警察ヲ設ケタルナリ從前ハ普國ニ於テハ其都度警察長官ニ依頼シテ警察官ノ補助ヲ求メシナリ

第十一編 裁判所書記

第一百五十四條 各裁判所ニハ書記局ヲ設ケヘシ獨逸裁判所ノ書記局ノ事務ハ宰相ヨリ又各連邦ノ裁判所ノ書記局ノ事務ハ其邦ノ司法省ヨリ定ムヘシ

普國ニ於テハ書記ハ二ケ年ノ見習ヲ爲シ然ル後一般ノ法律書式裁判費用等ノ試験ヲ上地方裁判所ヨリ又ハ其檢事長ヨリ受ケ司法卿ヨリ任セラル、者ナリ又書記ノ補助役ヲ任スルモ亦同シ止タ謄寫ノ爲メニハ其時ノ模様ニ因リ數人ヲ傭入ル

、コアリ

第十二編 使吏

第一百五十五條 獨逸裁判所ニ於テハ使吏ノ事務ハ宰相ヨリ又各連邦ニ於テハ其國ノ司法省ヨリ之ヲ定ムヘシ

使吏ノコニ付テハ普國ニ於テハ千八百七十九年七月十四日ニ使吏規則ヲ發シ且同年同月廿四日ニ事務章程ヲ發シタリ使吏モ亦二年ノ時間見習ヲ爲シ試験ヲ受ケタル上上等地方裁判所ヨリ任セラレ區裁判所ニ於テ其事務ヲ奉スヘシ其給料ハ政府ヨリ受クルニ非ス依頼スル人ヨリシテ其手数料ヲ受クルモノトス止タ政府ハ千八百「マルク」ノ最下高ヲ保證スルナリ若シ一年間ニ之ヨリ少ク受クルハ政府ヨリ其不足補充ヲ受クル

ナリ(使吏ノ呼出狀一通ヲ送達スルルハ七十五「ペニヒ」ヲ受ク
ヘシ伯林ニハ區裁判所一アリテ之ニ七十五人附屬セリ使吏ノ
手數料ニ付キ千八百七十八年六月廿日ニ規則ヲ發セリ)

第十三編 裁判所相互ノ囑托

第一百五十七條 裁判所ハ民事刑事ニ付キ相互ニ囑托セラル、義
務アリ

裁判所ハ一地方ヲ限テ管轄ヲ爲スモノナリ故ニ此裁判所ヨリ
シテ濫リニ彼裁判所管轄内ニ立入ルコトヲ得ス例ヘハ他ノ管轄
内ニ於テ證據人ヲ糺問スヘキ等ノコトアレハ其管轄裁判所ニ糺
問ノ依頼ヲ爲スヘシ然ルルハ其依頼ヲ受ケテ糺問スヘキ義務
アリトス

第一百五十八條 囑托ハ其處分ヲ爲スヘキ管轄地ノ區裁判所ニ爲
スヘシ

第一百五十九條 其囑托ヲ受ケタルルハ之ヲ拒ム可カラズ
但同等ノ裁判所ヨリ囑托シタルルハ囑托ヲ受ケタル裁判所ノ管
轄地ニ非サルカ又ハ爲スヘキ處分ノ囑托ヲ受ケタル裁判所ノ規
則ニ於テ禁シタルモノナルルハ之ヲ拒ムヘシ

一等上ノ裁判所ヨリ依頼ヲ受ケタルルハ如何ナルコトニテモ拒
ムコトヲ得サレモ同等裁判所ヨリ受ケタルルハ本條ノ場合ニ於
テ之ヲ拒ムコトヲ得地方裁判所ト區裁判所トハ此關係ニ於テハ
同等ノ位地ニ在ルモノナリ

第十四編 傍聽ヲ許スコト及ヒ公廷警察

第七十條 公判ニ於テハ傍聽ヲ許シテ審判ヲ爲スヘシ

第七十一條 第七十二條ハ離婚及ヒ治産ヲ禁スル事件ニシ

テ一方ヨリ傍聽ヲ禁センコトヲ申立タルハ直ニ傍聽ヲ禁スヘシ

第七十三條 如何ナル事件ニ於テモ公安ヲ害スルカ風俗ヲ害

スルノ恐アルハ裁判所ヨリ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第七十四條 如何ナル場合ニ於テモ判決ヲ言渡スルハ傍聽ヲ

許スヘシ

第七十七條 公廷内ノ靜謐ヲ保タシムルコトハ裁判長ノ義務ナ

リトス

第十五編 裁判所ノ言語

第八十六條 裁判所ニ於テ用フル言語ハ獨逸語タルヘシ

第八十七條 獨逸語ヲ解セサル者ノ關係スルハ通譯者ヲ命

スヘシ通譯者ハ誠實ニ通辨スヘキコトヲ誓約スヘシ

獨逸ニテハ魯國ノ境ニ於テハ「ポーレン」語ヲ用ヒ佛國ノ境ニ

於テハ佛語ヲ用ヒ「デンマルク」ノ境ニテハ「デンマルク」語ヲ用

フルコナレハ故ニ裁判所ニテ其用フル一定ノ言語ヲ定メ他ノ

言語ヲ用フルヲ許サ、ルナリ又普國ニ於テハ法律ヲ發シ行政

官ニモ職務上ノ事ハ獨逸語ヲ用フヘキコトニ定メリ

第十六編 會議及ヒ投票

第九十四條 判決ヲ爲スルハ法律ニ定メタル裁判官ノ員數必

ス集合スヘシ

裁判手續ノ永ク繼續スルハニハ裁判長ヨリシテ裁判官ノ補助ヲ

命シテ立會ハシメ裁判官中故障アルキハ代理セシムルコトヲ得
例ヘハ裁判官三人ト定メタルキ五人ニテ裁判ヲ爲シタルキハ
其裁判ハ無効タルヘシ何トナレハ法律ニ於テハ高キ點ト低キ
點トヲ定メタルニ非ス必ス其員數ヲ以テ決定スヘキコトヲ定メ
タルナリ裁判官ノ補助ハ通常ハ投票ニ加ハルコトヲ得ス止タ欠
席裁判官アルキニ限ルヘシ

第九十五條 裁判所ノ會議投票ハ傍聽ヲ許サス

裁判所ニテ見習ヲ爲ス者ハ其席ニ加ハルコトヲ得

第九十六條 裁判長ハ會議ヲ總括シ問題ヲ作り投票ヲ集ムヘ
シ(投票ハ言語ニテ爲スナリ)

問題ノ事件作り方及ヒ其順序又ハ投票ノ結果ニ付キ異論アルキ

ハ裁判所ニテ決定スヘシ

第九十七條 裁判官「シヨツフエン」陪審ハ最初ノ問題ニ多數
ヲ得サルカ爲メニ後ノ問題ノ投票ヲ爲スコトヲ拒ムコトヲ得ス

第九十八條 判決ハ法律ニ別ニ定メナケレハ半數以上ニ因テ
決スヘシ

金額ニ係ハリ三說以上ニ分カレ多數ヲ得サルキハ最多額ノ投票
ヲ其次ノ高ニ合計シテ多數ヲ得ヘシ

刑事ニ付テ(有罪無罪ノ投票ヲ除ク)三說以上ニ分レ多數ヲ得サ
ルキハ被告人ノ爲メ最モ不利ト爲ル投票ヲ其次ノ不利トナル投
票ニ合計シテ多數ヲ得ヘシ

法律ニ別段ノ定メアルトハ治罪ニ被告人ノ不利ト爲ル問題ノ

投票ニハ三分ノ二ノ多數ヲ要ストアリ例ヘハ地方裁判所ハ五人ニテ裁判ヲ爲セハ四人ノ同意ヲ要シ七人ノ裁判官ナルキハ五人ノ同意ヲ要スルカ如シ
員數ノ多少トハ價金ノ多少ヲ云フ例ヘハ一人ハ千「マルク」ヲ償フヘシト云ヒ一人ハ五百「マルク」ト云ヒ又一人ハ三百「マルク」ト云フカ如キハ千「マルク」ノ投票ヲ五百「マルク」ノ投票ニ合シ多數ヲ得ルカ如シ則本條ニ云フ所ノ最多ノ高ヲ次ノ投票ニ合スルナリ何トナレハ千「マルク」ヲ償フヘシト云フ者ハ固ヨリ三百「マルク」ヨリハ五百「マルク」ヲ償フヘキコニ不同意ナケレハナリ又一説ニハ各投票ノ員數ヲ合シ三ニ因テ割リタル高三定ムヘシト云ヘリ然レハ此説ハ現今ハ行ハレサルナリ刑

事ニ付キ期限罰金ノ數ヲ定ムルモ亦同シ

第九十九條 投票ヲ爲スノ順序ハ任官ノ順序ニ因テ定ムヘシ「シヨッフエン」裁判所ト商事局ニ於テハ年齢ノ長幼ニ從フヘシ最モ年少ノ者カ最初ニ投票ヲ爲シ裁判長ハ最後ニ投票ヲ爲スヘシ專任者ヲ命シタルモ專任者カ最初ニ投票ヲ爲スヘシ陪審ノ投票ハ抽籤ノ順序ニ從テ爲スヘシ陪審長ハ最後ニ投票ヲ爲スヘシ

年少ノ者ヲ最初ニ投票ヲ爲サシムル趣意ハ十分ニ其意見ヲ發セシムルノ意ナレハ實際ハ其効ナシ何トナレハ年長ノ者ノ説ヲ評議ノ時ニ於テ聞知レハナリ

第二百條 「シヨッフエン」及ヒ陪審ハ其會議及ヒ投票シタル事

件ヲ他ニ漏洩ス可カラス

裁判官ハ任官ノ始ニ於テ職務上ノ一切ハ秘密ニスヘキノ誓約ヲ爲セハ別ニ條ヲ設クルコトヲ要セス「シヨツフエン」及ヒ陪審ノ爲メニ特ニ本條ヲ設クルモノハ例ヘハ政事ノ黨派ノ争ヒアル并ニ他人ヨリシテ投票ノ模様ニ問ハレタル并此等ノ者ハ此條ヲ引用シテ拒辭スルコトヲ得ル爲メナリ

第七編 裁判所ノ休暇

第二百一條 休暇ハ七月十五日ニ始リ九月十五日ニ終ル

此休暇ヲ定ムルコトニ付キ「ノ理由アリ一ハ裁判官ニ保養ヲ爲サシムルト一ハ收獲ノ期限ニ當ル緊要ノ時刻ナレハ陪審」シヨツフエン」原告ト爲ル者ノ其事業ヲ妨ケサルカ爲メ且其

自由ヲ與ヘタルモノナリ

第二百二條 休暇中ハ止タ休暇事件ノミ裁判スヘシ

休暇事件トハ刑事又ハ至急ヲ要スル民事後見人ニ關スル土地ノ登記家資分散等ノコトヲ云フナリ是等ハ休暇中ト雖モ裁判所ニ於テ取扱フヘシ通常ハ四週間ツ、二ツニ割リ前後ノ休暇ヲ各員ニテ分ツ行政官ニハ別段法律ヲ以テ定メスト雖モ大抵同期限ニ休暇セリ

千八百七十八年七月一日ノ代言人規則

代言人ヲ置クコトニ付テハ「二ノ法アリ一ハ政府ヨリシテ命スルト一ハ隨意代言ヲ爲ス」ナリ現今歐羅巴各國ハ第二ノ法ヲ用フルナリ代言人ト爲ルニハ裁判官ト爲ルヘキ學力ヲ有スヘシ其學力

アル者ヨリ代言人タルノ願ヲ出シタルハ必ス之ヲ許スヘシ然レトモ代言人ノ職務ニ適セサル者例ヘハ公權ヲ剝奪セラル、カ營業ノ種類ニ因テハ司法省ヨリ代言人組合長ノ意見ヲ聞キタル上ニテ許サ、ルコアリ代言願ヲ出スルハ何レノ地ノ裁判管轄地内ニ於テ代言ヲ爲サンコヲ申出ヘシ然ル後ハ司法省ヨリシテ其地ノ地方裁判所ニテ代言ヲ爲スヘキコヲ許シ其裁判長ヲシテ代言人名簿ニ登記セシムヘシ代言人ハ獨逸内何レノ地ニ於テモ其區内ノ代言人ニ必ス依頼スヘキ事件ノ外ハ自由ニ爲スコヲ得レトモ區内ノ代言人ニ必ス依頼スヘキ事件例ヘハ區裁判所ニ非スシテ他ノ裁判所ニテ裁判スヘキ一切ノ民事ニ於テハ其管轄地ノ代言人ニ限り代言ヲ爲スコヲ得ルナリ

代言人ノ品行又ハ職務ヲ監督スルカ爲メ各上等地方裁判所區ニ於テ代言人組合ヲ設クヘシ其内ノ九人ヨリ十五人マテノ組合長ヲ選ミ其内ニテ會長一人ト代理人一人ヲ選ミ組合長ヲシテ一切ノ事務ノ監督ヲ掌ラシムヘシ懲戒ヲ爲スルハ組合長ノ内ヨリ五人ヲ選ムヘシ其内二人ハ會長代理人ヨリ成ルヘシ又其内ニテ上席人ヲ選ミ之ヲ懲戒裁判掛リトスヘシ懲戒裁判掛リハ代言人ニ呵責譴責罰金三千「マルク」以下ヲ科スルコヲ得其決定ニ對スル控訴ハ「ライフチヒ」ニ在ル懲戒控訴裁判掛ニ控訴スヘシ其裁判所ハ獨逸裁判所長ト裁判官三人ト其裁判所代言人三人ヨリ成ルヘシ代言人ハ政府ニ對シ獨立スル者ニシテ出納局ヨリシテ其手數料ヲ受クルニ非ス千八百七十九年七月七日ノ代言人手數料規

則ニ依頼人ヨリ一定ノ手数料ヲ受クルコトヲ得裁判使吏ノ如ク政
府ニテ其最下高ヲ保證セス

公證人ノ設ケ方ニ二アリ一ハ公證人ト代言人ノ事務ヲ全ク分ツ
コト佛國ノ如シ一ハ代言人ト其職務ヲ合一ニスルナリ普國ノ如キ
ハ是レナリ然レモ代言人タル者ハ必スシモ公證人ニ非ス公證人
タルモノハ必ス代言人タルヘシ何トナレハ公證人ハ公證スルコ
トヲ掌ル者ナレハ假令學カアルトモ公證ノカヲ與ヘサレハ公證人
タルコトヲ得サルナリ公證ノカヲ與フルトハ司法省ヨリシテ代言
人ニ公證人タルコトヲ命シ上等地方裁判所管轄内ニ住居ヲ定メシ
ムルナリ其事務ノ代言人ト異ル所ハ代言人ハ裁判所ニ於テ原被
告ヲ保護スル者ナレモ公證人ハ裁判所外ニ於テ證書ニ公證スルノ

ミナリ公證人ノ手数料ハ別ニ規則アリ其規則ニ從テ之ヲ受クヘシ

司法行政(普國)へ獨逸裁判所編制法ヲ施行スルニ付キ發シ
タル法律)千八百七十八年四月二十四日(普國法律全書二百
八十葉)

第七十七條 裁判所長及ヒ檢事ハ司法卿ヨリ發シタル規則ニ從
ヒ司法行政ノ事務ニ付テハ司法卿ノ屬官タルヘシ

裁判所長檢事ハ其事務ヲ行フ爲メ其屬官ヲ用フルコトヲ得

司法卿ノ司法行政ニ關スル事務トハ司法ニ關スル法律ノ草案
ヲ立ルト司法ニ關スル一般ノ監督ヲ爲ストニアリ

裁判所長ハ司法行政事務ニ付テハ自カラ之ヲ決スルモノニテ
他ノ裁判官ト評議スルニ及ハス例ヘハ司法卿ヨリ裁判官ノ昇

進ニ付キ所長ニ其見込ヲ申出スヘキノ類然レモ訴訟法治罪法
及ヒ裁判所編制法ニ於テ裁判所本局ト掲クル所ハ他ノ裁判官
ト評議決定スヘキモノトス

第七十八條 監督ノ權ハ左ニ掲クル者ニテ之ヲ行フヘシ

監督ノ權トハ司法ノ事務ハ延滞ナキコトヲ最モ緊要トスレハ之
ヲ延滞ナク取扱フコトヲ監督スルナリ

一司法卿ハ都テノ裁判所及ヒ檢事ニ對シ

二上等地方裁判所長ハ其裁判所并ニ管轄内ノ裁判所ニ對シ

三地方裁判所長ハ其裁判所并ニ管轄内ノ裁判所ニ對シ

四檢事長及ヒ一等檢事ハ管轄内ノ檢事ニ對シ

五區裁判所ノ一等檢事ハ其檢事ニ對シ

監督ノ權ハ其他ノ裁判所ノ官吏又ハ備ニモ及フ者トス

第七十九條 裁判官一人アル區裁判所ニ於テハ其裁判官ヨリ其
所屬ノ都テノ官吏又ハ備ヲ監督スヘシ

裁判官數人アル區裁判所ニ於テハ司法卿ヨリ裁判官一人ニ命シ
テ裁判所ノ官吏又ハ備ノ監督ヲ爲サシムヘシ

草案ニテハ裁判官ニ裁判官ノ監督ヲ爲サシムルコトニ定メタレ
モ上院ニ於テ之ヲ删除セリ故ニ止々裁判官ニ非サル裁判所ノ
官吏ニノミ監督ヲ爲スナリ然レモ裁判官見習ハ監督ヲ爲スヘ
シ

第八十條 監督ノ權トハ裁判官ニ非サル官吏ニ對シ規則ノ如ク
事務ヲ行ハサルカ爲メ之ヲ呵責シ又ハ百「マルク」以下ノ過怠料

ヲ以テ強テ其事務ヲ行ハシムルコトヲ云フナリ過怠料ヲ科スル前ニハ前以テ之ヲ科ス可キコトヲ言渡スヘシ

裁判官ニ對シテハ懲戒法ニ因テ監督ノ權ヲ定ムヘシ

裁判官ニ非サル官吏ニ強テ其事務ヲ爲サシメンカ爲メ過怠料ヲ定メタルナリ草案ニハ裁判官ニモ過怠料ヲ定メタレ上院ニテ之ヲ删除シ懲戒法ニ之ヲ定ムルコトニ決セリ千八百七十九年四月九日ニ懲戒法附録トシテ裁判官ニ對スル監督權ヲ定メタリ其第二十三條ニ據レハ裁判官ニ對シテハ過怠料ヲ科スルコトヲ得ス止タ譴責ヲ爲スヲ得ルノミ然レモ裁判官ニ於テ其譴責ニ不服ナルハ懲戒裁判ヲ開クヘキコトノ申立ヲ爲スコトヲ得

第八十一條 一地方上等裁判所及ヒ地方裁判所ノ檢事ハ檢事ニ附屬スル警察官ニ對シテ第八十條ノ監督權ヲ有セリ但無給ニテ警察官ノ事務ヲ勤ムル者區長ノ類ニ對シテハ此限ニ在ラス
二第七十三條ニ從テ定ムヘキ(司法卿ヨリ)官吏ハ裁判所使吏ニ對シテ第八十條ノ監督權ヲ有ス

本條ハ司法卿ヨリ裁判所ノ官吏ノ監督ヲ命シタル區裁判官ヨリ使吏ヲ監督スルコトナリ一人ノ裁判官アル區裁判所ニテハ固ヨリ使吏ノ監督ヲ爲スヘシ

第八十四條 裁判所及ヒ檢事ハ監督官ノ求ニ因リ法律ノ起草及ヒ司法行政ニ付キ意見ヲ述フヘキ義務アリ
通常ハ本條ノ場合ニハ司法卿ヨリ上等地方裁判所ニ其意見ヲ

聞キ其所長ヨリシテ又地方裁判所ニ其意見ヲ聞キ其所長ヨリシテ又其管轄内ノ裁判官ニ意見ヲ聞クナリ

第八十五條 司法行政ノ事件就中事務ノ扱方及ヒ延滞ニ付キ申立タル故障ハ監督ノ手續ヲ以テ裁定スヘシ

法律上ニ付テノ故障ナレハ通常ノ裁判手續ヲ用ユレモ本條ノ如キハ其長官ニ故障ヲ申立テ長官ハ一人ニテ之ヲ裁定スルナリ例ヘハ區裁判官ニテ延滞スル爲メ故障ヲ申立ルニハ地方裁判所長ニ之ヲ爲シ其裁定ニ不服ナルモハ上等地方裁判所ニ申立テ仍ホ不服ナルモハ司法卿マテ故障ヲ申立ツルコトヲ得

第九十七條 文武官吏其職務權限ヲ越エテ他人ノ權利ヲ害シタルカ爲メ裁判所ニ訴ヘラル、要件ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ但其官吏

ノ長官ヨリ許可ヲ受クヘキコトヲ法律ニ掲ク可カラズ

文武官ト雖モ常人ト等シク他人ノ權利ヲ害スルモハ固ヨリ裁判所ニ訴ヘラル、コトハ言フヲ俟タス然レモ佛法ニ倣ヒ官吏ノ職務ニ付キ裁判所ニ訴ヘタルモノ權限爭ニ付キ別ニ法律ヲ設ケタリ此法律ヲ設ケタル所以ハ政府ヨリシテ裁判所ヲ信セスシテ行政官ノ職務權限ヲ越タルヤ否ニ付キ權限爭裁判所ニ於テ之ヲ裁判セシメタリ其裁判所ハ止タ其官吏ノ權限ヲ越タルヤ否ヲ判決スルノミ

千八百五十四年二月十三日ノ官吏ノ職務ニ係ル訴訟規則

第一條 文武官吏其職務ヲ行ヒタルカ爲メ又ハ之ヲ怠リタルカ爲メ民事又ハ刑事裁判所ニ訴ヘラレタルモハ其長官タル州ノ官

署又ハ中央官署ハ其官吏ニ於テ其職務權限ヲ越ヘス又ハ爲スヘキヲ怠ラス且通常裁判ニ付スルヲ不相當ト信シタルキハ權限爭ノ訴ヲ起ス權アリ

其訴訟ニハ千八百七十九年八月一日ノ裁判所ト行政官署トノ間ニ起リタル權限爭規則ヲ適用スヘシ

第二條 權限爭裁判所ニ於テ判決ヲ爲ス前ニ猶ホ審問ヲ要スヘシト認メタルキハ行政官署又ハ通常裁判所ヲシテ之ヲ爲サシムヘシ特ニ其裁判所ノ審問ヲ繼續セシメ又ハ部分ヲ定メ審問セシムヘシ

判決ヲ爲ス前ニ審問ノ結果ニ付キ其事件ニ關係スル原被告ヲ訊問スヘシ且裁判中ノ裁判所ニ於テ其調書ヲ檢閲シ四週間ノ期滿失權期限内ニ答辨シ得ルコトヲ通知スヘシ其他ハ千八百七十九年八月一日ノ規則第七條已下ニ從フヘシ

第三條 權限爭裁判所(第二條)ニテ官吏ノ權限ヲ越エス又ハ爲スヘキヲ怠ラス且通常裁判ニ付スルヲ不相當ト認メタルキハ通常裁判所ニテ裁判ス可カラスト判決シ之ニ反シタル場合ニ於テハ通常裁判所ニテ裁判スルコトヲ得ヘシト判決スヘシ其判決アルモ通常裁判所ニテ官吏ヨリ其權利ヲ防護スルコト又ハ其事件ヲ裁判スルニ影響ヲ生スルコト勿カルヘシ

第四條 前數條ノ規則ハ已ニ退職シタル官吏又ハ官吏ノ相續人ニ對シ職務ニ關スル裁判(第一條)ヲ始メタルキニモ亦適用スヘシ

第五條 官吏トハ(第一條)政府ノ間接官吏ヲモ含蓄スルモノトス

第六條 又此法律ハ軍人ノ其職務ヲ行ヒタルカ爲メ又ハ其職務ヲ怠リタルカ爲メ軍事裁判所ニ非ス他ノ裁判所ニ訴ヘラレタルキモ亦適用スヘシ此場合ニ於テハ其長官タル師團司令官又ハ軍團司令長官ヨリ權限爭ノ訴ヲ起スコヲ得其權限爭ヲ裁判スル裁判所ノ事務ハ軍事司法部ニ於テ之ヲ爲シ國王ヨリ其都度三年ノ期限ヲ以テ任シタル上等士官三人之ニ加ハリテ裁判スヘシ其裁判ハ法律ニ達スル主任者二名ノ朗讀ニ因テ爲スヘシ但其内一名ハ司法卿ヨリ他ノ一名ハ陸軍卿ヨリ之ヲ命スヘシ

第七條 此法律ハ左ノ者ニ對シテハ適用ス可カラス

一 裁判官

- 一 其他ノ司法官吏但檢事及ヒ司法警察官ヲ除ク
- 二 在「キヨルン」控訴裁判所管轄内ノ土地書入簿監守者及ヒ死生婚姻登記官吏

此法律ニ付テハ其後裁判所ヨリ屢々之ヲ廢スヘキノ議起レリ然ノミナラス權限爭裁判所ヨリモ廢スヘキノ説ヲ發シタリ且司法卿ヨリモ之ヲ廢シ裁判ノキハ必ス其長官ノ見込ヲ聞クヘキコトニ爲サントシタレト上院ニ於テ之ヲ拒ミタリ其後復々檢事ニ限り告訴ヲ爲スノ權ト共ニ廢セントノ説起リタレト亦獨逸上院ニ於テ之ヲ拒ミタリ千八百七十七年一月廿七日ニ獨逸裁判所編制法ヲ施行スル法律第十一條ニ其中庸ヲ取テ左ノ如

ク定メリ

各連邦ノ法律ニ於テ官吏ノ職務ニ對シ民事又ハ刑事裁判所ニ訴フルコノ要件ヲ定メタルモノハ全ク廢止スヘシ

然レモ各連邦ノ法律ニ於テ其長官ノ求ニ因リ又ハ求メナクトモ先ツ特別ノ官署ニテ預シメ權限ヲ越エタルヤ否ヲ裁判スルニ非サレハ通常裁判所ニ訴フルコヲ得サルノ法律ハ左ノ折衷ヲ以テ其効ヲ有スルモノトス

一 權限爭ノ裁判ハ官吏其權限ヲ越エタルヤ又ハ怠リタルヤ否ニ止ルヘシ

二 上等行政裁判所ノ設ケアル連邦ニ於テハ其裁判所ニテ權限爭ヲ裁判スヘシ上等行政裁判所ノ設ケナキ連邦ニ於テハ大審院

ニ於テ裁判スヘシ

第七編 裁判官ニ非サル官吏

第九十八條

裁判官ニ非サル官吏檢事ヲ含ムノ關係ハ法律ヲ發シテ之ヲ

定ムヘシ其法律ハ政府ニ對シテハ官吏ヲ任スルノ權ヲ制限スルコ

ナク官吏ニ對シテハ濫リニ其職務及ヒ俸給ヲ奪ハサルノ保護ヲ與

フヘシ

行政官吏ニハ裁判官ノ如キ獨立スル權ヲ與ヘス畢竟裁判官ニ獨

立ノ權ヲ與ヘタルハ裁判官ノ身上ノ爲メニ與ヘタルニ非ス則國

家ノ爲メニ與ヘタルナリ此憲法ヲ發行後行政官ノ關係ヲ定ムル

法律ハ未タ發セス止タ千八百五十二年七月廿一日ニ行政官懲戒

法ヲ發シタルノミナリ併ナカラ獨逸國ニハ千八百七十三年三月

三十一日ニ獨逸帝國官員權利義務ヲ定ムル法律ヲ發シタリ此法律ハ固ヨリ普國ニハ適用ス可カラスト雖モ實ニ完全ナル法律トス

普國ニ於ケル官吏ノ關係

官吏ヲ命スルコトハ則國憲ヨリ爲スモノナリ故ニ裁判官檢事書記官ハ盡ク國王ノ自カラ任スル所ナリ其他ノ官吏ヲ任スル權モ勿論國王ニアレモ之ヲ國王ヨリ中央官署又ハ州ノ官署ニ委任シタルナリ國王自カラ任スル官吏ハ卿ヨリ申立テ卿ノ責任ヲ以テ國王ヨリ命スルナリ官吏ハ必スシモ其命ヲ受クヘキノ義務ナシ止タ任セラル、ノ權ヲ有スルノミ然レモ貴族ノ必ス官吏タルヘキ特權ハ憲法ニテ之ヲ廢シタルヲ以テ何人ニテモ法律ニ定メタル

學力ヲ有スレハ官吏ニ任セラル、ノ權アリ然レモ團結自治ノ官吏ハ之ニ反シ任セラル、ノ權ハ有セスト雖モ選舉セラル、ハ必ス其選舉ヲ受クヘキ義務アリ

如何ナル要件ヲ有スレハ官吏ニ任セラルヘキ者ナルヤハ左ノ如シ

第一公權ヲ有スルコト(公權剝奪公權停止或ハ公ケノ職務ニ任セラル、ノ權ヲ失フコト)品行ノ正シキコト(懲戒法ニ因レハ品行ノ不正ナル官吏ハ免職セラル、コトヲ得)

第二一般ノ學力及ヒ其職務ニ關スル學力アルコト(一般ノ學力トハ九年間中學校ニアリテ試験ヲ受クヘキコト三年間大學校ニアリテ試験ヲ受クヘキコト大學校ニ於テハ後來裁判官ト爲ラント

スル者ハ主トシテ法律ヲ學ヒ行政官ト爲ラントスル者ハ主トシテ經濟學國法學ヲ學フヘシ然レモ普通ノ學科ニ止マリテ未ダ專門學ニ從事セサルモノナリ

是則普國ノ佛英等ニ勝ル、所ナリ

其試験ニハ裁判官ト爲ル者モ行政官ト爲ル者モ同一ニシテ上等地方裁判所試験掛リニテ之ヲ試験シ其試験ニハ大學ノ博士檢事之ニ加ハルヘシ

職務ニ關スル學力トハ後來裁判官ト爲ラントスル者ハ裁判所檢事、代言人ニ付テ四年間見習ヒタル後、イニシヤトイフシテフシクモコシヨシヨシ司法試験掛ノ試験ヲ受クヘシ行政官ト爲ラントスル者ハ行政官署ニ就テ四年間見習タル後行政試験掛ノ試験ヲ受クヘシ

以上ノ學力ハ裁判官ニハ必ス之ヲ要スヘキモノニシテ若シ國王ヨリシテ學力ナキ者ニ任スルハ憲法ニ背クモノナリ(第九十條)然レモ行政官就中諸省ノ卿ハ假令試験ヲ爲サルモノニテモ又ハ外國人ニテモ國王ヨリ之ヲ命スルコトヲ得例ヘハ百姓タリトモ耕作ニ巧ニシテ議院ニ於テ其能力ヲ顯ハシタルハ國王ヨリ農務卿ニ任スルコトヲ得又他國人ト雖モ一事業ニ精練ナル者ハ卿又書記官ニ命スルコトヲ得現ニ普國ニ於テ鐵道ノ事ニ精シキ墾地利人ヲ商務省ノ書記官ニ任セラレタルカ如シ

第三任命ノハ辭令書ヲ以テ等級及ヒ官名ヲ定ムルコト長官ヨリシテ其職務ニ就カシムルコト公告紙ヲ以テ其任命ヲ公告スルコト

(之ニ因テ他人ニ對シ官吏タルノ證憑ヲ得ルナリ)國王ニ忠節ヲ盡シ且憲法ニ背カサルノ誓約ヲ爲ス₁保證金ヲ出ス₂就中政府出納官吏ニ之ヲ出サシムヘシ

官吏職務時間ノ權利義務

義務ニハ官吏タル者ノ一般ニ盡スヘキ義務アリ則品行ヲ正シクスル₁ナリ(不品行ナル₂ハ懲戒法ニテ免職セラルヘシ)特別ノ義務アリ則擔任スル職務ヲ最も注意シテ行フヘキ₁ナリ(不注意ナル₂アレハ直ニ懲戒ヲ受クヘシ)又法律及ヒ職務章程及ヒ長官ノ命令ニ從フヘキ₁アリ然レ₂長官ヨリシテ刑法ニ背クヘキ命令ヲ爲シタル₃例ヘハ卿又ハ出納局ノ長官ヨリ其屬官ニ其金銀ヲ私シテ持來ルヘキ₁ヲ命シタルカ如キハ勿論其命ニ從フ

ニ及ハス若シ其命令ニ從ヒタル₂ハ之ヲ以テ其責ヲ免カル、₁ヲ得ス立權政体ノ國ニ在テハ長官ノ命ニ從フヘキヤ否ニ付テハ其命ノ法式ニ背ク₁及ヒ法律ニ背ク₂ヲ區別スヘシ法式ニ背キタル場合トハ例ヘハ憲法ニ從ヒ卿ノ手署アルヘキニ其手署ナキ命令又ハ權ナキ官署ヨリシテ出シタル命令ハ(例ヘハ「ビスマルク」ヨリ裁判官ニ命令スルカ如キ)之ニ從フニ及ハス法律ニ背ク場合ニテハ其命ヲ受ケタル者ヨリシテ其長官ニ法律ニ背ク箇條ヲ陳述スヘシ仍ホ之ヲ聞カサル₂ハ假令法律ニ背キタル命ト雖₁此之ニ從フヘシ然ル₃ハ其官吏ハ之カ爲メ其責ヲ負フニ及ハス(通常ハ此場合ニハ辭職スヘキ₁モナリ)止タ裁判官ニ限テハ其裁判事務ニ付キ長官ノ命令ニ從フヘキ義務ナシ

官吏ニ特別ナル制限ヲ爲ス

一私業ヲ起シ又ハ商業ヲ營ムニハ其長官ノ許可ヲ得ヘキ
 二官吏ハ其任所ニ止マルヘシ其地ヲ離ル、ニハ休暇願ヲ出シテ許可ヲ得ヘシ

三職務ニ關スル事件ヲ他人ニ漏泄ス可カラサルコト(從前ハ職務上ノコトハ一切他人ニ漏泄スルコトヲ禁シタレモ今日ハ稍々寬ニ爲レリ其事件ノ性質ニ從テ之ヲ漏泄ス可カラサルモノアリ)例ヘハ城塞ノ設備軍機ノ秘密ノ類ハ之ヲ漏泄スルハ刑法ニ因テ處分セラルヘキモノナリ又ハ長官ヨリシテ殊更ニ他ニ漏泄スヘカラサルコトヲ命シタル事件ヲ漏シタルハ懲戒法ヲ以テ罰セラル、ノミ其他ハ漏泄スルモ其罰ナシ

其他官吏ハ長官ノ許可ヲ得サレハ後見人タルコトヲ得ス

官吏ノ權利

官吏ハ特別ニ刑法ニ因テ保護ヲ受ケリ其職務ヲ行フカ爲メ就中長官ノ命ヲ奉シタルカ爲メニ他人ヨリ訴ヘラル、ハ政府ニテ其責ヲ負フヘキ

其職務ニ應スル等級官名(千八百十七年二月七日ノ法律)(裁判官ノ職務上ノ等級ハ五等ナリ別ニ四等ヲ與ヘタルハ「ラート」ト稱セリ)官吏ノ管轄内ニ於テ其職務ヲ行フハ何人ニテモ其命ニ從フヘシ從ハサルハ則國憲ニ背ク者トシテ罰ヲ受クルノミナラス其命ヲ強テ爲サシムル執行法アリ

官吏ノ財産ニ關スル權利

官吏其財産上ニ請求スル權アルコト獨逸裁判所マテ順次ヲ逐フテ
裁判ヲ求ムルヲ得ルコト上告ニ付テ金額ノ制限ヲ受ザルコト（通常
ハ千五百マルク以下ノ金額ハ上告ヲ許サス）

官吏ハ職務上ノ正金立替ヲ求ムルコトヲ得例ヘハ裁判官カ證人ノ
家ニ行テ訊問シタルキハ馬車料ヲ求ムルノ類則旅費日當規則ニ
其金額ヲ精細ニ定メリ

官吏ハ俸給ト官宅ト又或ル官吏ハ其外ニ消費物炭薪ヲ受クル權
アリ併ナカラ從前行ハレシ「スポルテルム」官吏ノ爲シタル手數料
ヲ人民ヨリ取立ルコトヲ
云ヲ全ク廢セリ官宅ヲ得サル官吏ハ官宅料トシテ規則ニ定ムル
金額ヲ受クヘシ其金額ハ官吏ノ等級及ヒ職務上住居地方ノ物價
ノ高低ニ因テ定メタルモノナリ

俸給ハ官吏ノ手間代ニ非ス商人トハ異ナリ商人ハ多ク働ケハ
多ク利ヲ得レト官吏ハ多ク働クモ少ク働クモ同等ニ屬スレハ
同一ノ俸給ヲ受クルナリ故ニ俸給ハ官吏ノ其身ヲ終身官ニ致
シタルヲ以テ其保養ノ爲メニ給ス故ニ退隱料ヲ給スルナリ
俸給ハ法律ヲ以テ定ムヘシ上等官吏ノ俸給ハ一定ノ金額ヲ定メ
其他ノ官吏ニハ最多數ト最少數トヲ定メリ俸給ノ増加ハ通常ハ
新故ノ順序ヲ以テ増加スヘシ止タ裁判官ニ限テハ法律ニ因テ之
ヲ定メリ行政官ニテハ法律ニ其定メナシ普國ノ裁判官ノ昇進ハ
上等地方裁判所管轄内ニ地方裁判所裁判官區裁判所ノ裁判官ノ
總數四百四十九人アリ之ヲ十三等ニ分チ一等毎ニ三百「マルク」
宛ヲ増加シ最少數ハ二千四百「マルク」ヨリ始リ最多數ハ六千「マ

ルクニ至ルヘシ

官吏ハ止タ自分相當ニ生活ヲ爲スヘキ俸給ヲ受クル者ナレハ營業者ノ如ク將來ノ用意ヲ爲スル能ハス故ニ政府ハ職務ヲ行フ能ハサルニ至ルキハ保養金トシテ退隱料ヲ給スヘシ退隱料ハ法律ヲ以テ之ヲ定メタリ其法律ノ趣意ハ官吏ノ十年間奉職シタル後身體精神衰弱シ職務ヲ勤ムル能ハサルニ至ルキハ之ヲ給スルナリ又十年以内ト雖モ職務ヲ行フニ因テ創傷ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹テ其職ヲ奉スル能ハサルニ至ルキモ亦之ヲ給スヘシ其他國王ヨリ法律ヲ發シテ十年以内ノ者ニ給スルコトアリ退隱料ノ高ハ滿十年以上十一年以下ニハ俸給ノ四分ノ一ヲ給シ一年毎ニ増加シテ終ニ四分ノ三マテニ至ルヘシ但最終ノ職務ノ

俸給ニヨリ計算スルナリ

官吏ノ遺族ハ退隱料ヲ求ムル權ナシト雖モ死後翌月分ハ之ヲ給スヘシ又「フリデリーヒデルグローセ」王ハ官員ノ家屬救助貯蓄所ヲ設ケリ其法官員ノ七百五十「マルク」以上ノ俸給ヲ得ルモノハ救助貯蓄所ニ於テ退隱料ヲ保險セシムル義務ヲ負ハシメタリ死後ニ受ケ取ルヘキ金額ハ千五百「マルク」ヨリ三百「マルク」マテト定メリ千八百三十一年二月廿七日貯蓄所規則アリ

官吏ノ職務ノ止ムコト

官吏ハ一地方ニ止ムヘキ權利ナシ故ニ轉移セシメラル、コトアリ轉移セシムルニハ等級及ヒ俸給ヲ減スルコトナク且法律ニ定メタル轉住料ヲ給スヘシ轉住料ハ十分ニ定メアリシ故ヘ官吏轉住ノ時ハ金額ヲ剩スコトヲ得ル由

裁判官ハ裁判所編制ノ變スルニ非サレハ其意ニ反シテ轉住セシムルコトヲ得ス又懲戒ニ因テ轉住セシメラル、コトアリ然ルモハ俸給ヲ減スルカ又轉住料ヲ給セサルカ又ハ兩ナカラ行フコトアリ官吏ハ又官署編制ノ變スルカ爲メ一時休職セシメラル、コトアリ又或ル官吏ハ何時タリトモ政府ノ説ニ異ナルコトアルモハ休職セシムルコトアリ例ヘハ卿大輔少輔州長縣令軍務會計官檢事郡長公使領事等ナリ然レモ其後再ヒ職ニ就カシムヘキモノナリ休職料ハ三百マルク以上ノ俸給ナレハ半額ヨリ増加シテ六千「マルク」ヲ越フ可カラス

官吏ハ又自カラ退隱願ヲ出シテ退隱スルコトヲ得此場合ニ於テハ其長官ニテ先ツ職務ヲ勤ムルコト能ハサルヤ否ヲ檢査シ之ヲ至當

トシタルモハ卿ニ其趣ヲ申出シ卿ニテ之ヲ決定スヘシ又職務ヲ勤ムルコト能ハサルニ至ルモ其願ヲ出サ、ルモハ強テ退隱セシメラル、コトアリ行政官ナレハ其長官ヨリ卿ヘ申出テ之ヲ退隱セシム其命ニ對シテハ内閣ヘ故障ヲ申立ルコトヲ得裁判官ナレハ其長官ヨリ管轄地方上等裁判所ノ懲戒掛ニ申出テ之ヲ裁判スヘシ其判決ニ對シテハ故障ヲ申立ルコトヲ得ス

退隱シタル後ハ其退隱料ノ高ハ長官タル卿ト大藏卿ト協議ノ上之ヲ定ムヘシ其高ニ對シテハ本人ヨリ通常裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

職務ヲ免スルコトハ止タ懲戒裁判ヲ經ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス其罰ニ同責譴責罰金拘留又ハ俸給ヲ減シ轉住料ヲ給セスシ

テ轉職セシムルヲ免職シテ退隱料ヲ給セサル
 又一年以上ノ自由ヲ奪フ刑ニ處セラル、カ又ハ公權剝奪公權停
 止又ハ公ケノ職務ニ就ク權ヲ失ヒタルハ自然ニ其職務ヲ失フ
 ヘシ又官吏ノ職務ニ不相當ナル不品行ヲ爲シタルハ免職セラ
 ル、コアリ行政官ニシテ國王又ハ卿ヨリシテ命セラレタル者ナ
 レハ懲戒裁判所ニテ始審裁判ヲ爲シ州ノ官署ノ官吏ナレハ其官
 署ニテ始審裁判ヲ爲シ(三年ノ時間ヲ以テ國王ヨリ七人ノ裁判
 官ヲ命ス其一部ハ「カンメルゲリヒト」ノ裁判官タルヘシ)其判決
 ニ對シテハ並ニ内閣ニ控訴ヲ爲スコヲ得裁判官ナレハ地方上等
 裁判所ノ懲戒掛ニテ始審裁判ヲ爲シ其裁判ニ對シテハ「カンメル
 ゲリヒト」ノ控訴懲戒裁判掛ニ控訴ヲ爲スコヲ得(裁判官ハ十五

人ニテ裁判スヘシ是レ則「ラーベルトリミナール」ノ代リト爲リ
 タルモノナリ)(千八百七十九年四月九日ノ懲戒規則改正法律ヲ
 參看スヘシ)

上等行政裁判所ト會計審査員ハ自カラ懲戒裁判ヲ爲スヘシ(控
 訴ノ道ナシ)

獨逸裁判所ニ於テモ自カラ懲戒裁判ヲ爲セリ(控訴ノ道ナシ)
 獨逸行政官ニ付テハ千八百七十二年三月三十一日ノ官吏權利義
 務規則ヲ以テ懲戒裁判所ヲ定メタリ始審裁判所ハ率子各縣ニ設
 ケ裁判官七人其内四人ハ通常裁判官タルヘシ控訴裁判所一ヶ所
 ヲ「ライフチヒ」ニ設ケ裁判官十一人其内所長ト少クモ五人ハ通
 常裁判官タルヘシ其他ノ者ハ獨逸上院ノ議員タルヘシ

官吏ハ自カラ辭職スルコトヲ得普國ノ法律全書ニ因レハ辭職シタル
ルルハ國家ノ害ト爲ラサルルルニ限り之ヲ聞届クヘシト掲載スレ
ル今日ノ情態ニ適セス實際ニ於テハ辭職スル者ニハ必ス聞届ク
ルコトナク固ヨリ辭職シタルルルハ退隱料ヲ給セスト雖モ其職務ニ
就キタル尊號ハ仍ホ有スヘシ例ハ「エキ
セレニス」

第六普魯西國憲法四

第八篇 大藏會計

第九十九條 政府一切ノ收入及ヒ支出ハ毎年豫メ計算シテ會計豫算
表ヲ作ルヘシ

會計豫算表ハ毎年法律ヲ以テ之ヲ確定スヘシ

稍々大ナル理財ハ必ス豫算ヲ要ス故ニ國家ノ如キ大ナル理財ニ
於テハ豫シメ其出入ヲ定メサルヲ得ス然レモ國家ノ支出ニハ限
リアル者ニシテ一ハ支出スヘキ金額ノ利益トナル場合ニ非サレ
ハ支出ス可カラサルト一ハ入額ニ滿ル外ハ支出ス可カラストナ
リ國家ノ事務ハ國ノ開明ニ赴クニ從ヒ増加スル者ナリ故ニ豫算
ハ數年前ニ之ヲ定ムルコトヲ得ス普魯西ニテハ年々ニ之ヲ定メ四

月一日ヨリシテ翌年三月三十一日マテヲ一會計年度ト定メタリ」
 其豫算ハ固ト大略ヲ定メタル者ニシテ精細ヲ定メタル者ニ非ス
 之ヲ作ルコトハ大藏省ノ要務ニシテ其大略ヲ定ムルトハ數年經過
 シタル歲出歲入ヲ平均シテ定ムルモノナリ一己一人ト雖モ豫シ
 メ概略ヲ知ラサルモハ理財ノ道立タス況ヤ國家ノ財政ヲ調フル
 ニハ政体ノ如何(立君政体共和政体ノ類)ヲ問ハス必ス定メサル
 可カラサルモノニ於テウヤ

立憲政体ニ在テハ議員ハ會計豫算表ヲ確定スルニ加ハル權ヲ有
 セリ其後ハ英國ノ憲法ニ從ヘハ止タ未タ法律ニ定メナキ歲出入
 ノ確定スルノミナリ佛國及ヒ獨逸國ニテハ英國ノ權ヲ誤解シテ
 法律ニ因テ已ニ定メタルモノト否トヲ問ハス盡ク歲出入ヲ確定

スル權アリト爲シタリ此說ニ從フモハ都テ法律ハ一年間ニ限り
 効力ヲ有スヘキモノト爲リ又此權ハ諸省ノ卿ヲ退クルノ強迫法
 トナレリ然レモ國家ハ一日モ轉動ヲ止ム可カラサルモノナレハ
 當時ニ於テハ此說ヲ非ナリトシ歲出入ニ二種ノ區別ヲ爲セリ則
 缺ク可カラサルモノト利益ト爲ルヘキ者ト二ツニ分テリ一ノ場
 合ニハ議院ニテ之ヲ動カスコトヲ得ス二ノ場合ニハ之ヲ動スコトヲ
 得ルナリ本條第二項ニ所謂毎年法律ヲ以テ確定スヘシトハ如何
 ナルコトヲ云フカ他ノ法律ヲ作ルモト同法式ニ從フコトヲ云フナリ
 則豫算ヲ確定スルニハ行政官ノミ爲スコトヲ得ス議員モ之ニ加ハ
 ルヘキノ意味ナリ

歲出入ノ確定ハ固ト行政ノ事務ニシテ他ノ行政事務ニ異ナルコト

ハ議員ノ之ニ加ハル所ナリ行政事務ハ一切法律ニ從フヘシ故ニ
 歳出入ヲ確定スルキニ當テハ議員タリトモ又法律ニ從フヘシ之
 レニ因テ議員ノ税ヲ許可スル權ト支出ヲ許可スル權ノ已ニ法律
 ニ基クモノト基カサルモノトヲ區別セサル可カラサルナリ則新
 ニ科スル税ナルカ税額ヲ増スルカ又ハ已ニ期限ノ滿チタル税ヲ
 新タニ科セントスルキハ議員ニテ許可ヲ拒ムコトヲ得レハ已ニ法
 律ニ基キタルモノハ必ス許可スヘシ歳出モ亦同ク法律ニ基キタ
 ルモノハ拒ムコトヲ得サレハ新タニ利益ノ爲メ支出スルカ如キハ
 拒ムヲ得

歳出ノ已ニ法律ニ因テ定メタルモノナルカ又ハ缺ク可カラサル
 モノニシテ其高ノ已ニ定メタルモノ例ヘハ負債ノ利息官吏ノ俸
 給ノ如キハ止タ其數ヲ検査スルニ止マレハ法律ニ於テ高ノ定マ
 ラサルモノ例ヘハ兵士ノ員數ヲ増シテ其入費ヲ定メサルカ或ハ
 禁獄所ヲ設クルコトヲ定ムレハ其費用ヲ定メサルキハ議員ニテ其
 高ヲ定ムヘシ

本條ノ一項ニ從ヘハ毎年豫メ會計豫算表ヲ作ルヘシトアリ必ス
 年々會計豫算表ヲ作テ行政ヲ爲スヘキモノナレハ万一政府ヨリ
 豫算表ヲ議院ニ出スコトヲ怠ルカ又ハ下院ニテ數ヶ條ヲ改正削除
 スルカ或ハ上院ニテ之ヲ拒ミ因テ豫メ作ルコト能ハサルキハ如何
 爲スヘキカ則佛ノ說ニ從ヘハ國家ノ運轉ハ直チニ止リ兵士ハ盡
 ク散解シ裁判所ハ閉鎖スヘシ獨逸ニテモ千八百六十二年ヨリ千
 八百六十五年頃マテハ同ク此說ヲ主張シタレハ實際ニ於テ運轉

ノ止ラサル所ヲ見レハ此説ノ非ナルコトヲ認メタリ或ハ連邦ノ憲法ニ從ヘハ豫シメ會計豫算表ヲ作ルコト能ハサルモハ舊豫算表ニ從フヘシト定メタル所モアリ普國ニ於テハ憲法第百九條ニ從前ノ稅ハ之ヲ取立ヘシトアリ假令會計豫算表ヲ作ラサルモ歲入ハ異ナラサレハ政府ニ於テ必用ナリト認ムル歲出ヲ爲スコトヲ得ルトシタリ止タ此場合ニ於テハ政府ニテ爲シタル歲出ノ責ヲ負フヘシ然レモ其後ニ豫算表ヲ議院ニ出シテ許可ヲ得ヘシ例ヘハ普國ニ於テ六十六年ニ六十二年ヨリ六十五年マテノ豫算表ヲ補ヒタル如シ之ヲ「エנדムテイツスルマイルング」(議院ニ後ニ差出スコトナリ)ト云フ

會計豫算表ハ大藏卿ト行政長官ト協議シテ之ヲ作り其草案ヲ内閣ニテ評定シタル後大藏卿ヨリ先ツ之ヲ下院ニ差出ス可シ下院ニ於テ之ヲ議定シタル後ハ宰相ヨリ之ヲ上院ニ差出スヘシ上院ニ於テハ之ヲ各條ニ付議スル事ヲ得ス議案ノ全体ニ付テ可否ヲ決スルノミ然ル後可ト決シタルモ之ヲ國王ニ差出シ國王ノ許可ヲ得タル上ニテ之ヲ頒布スヘシ否ト決シタルモハ政府ニ於テ新タニ草案ヲ作り議院ニ出スコト初ノ如シ

歲出ハ種類ヲ分チ各省毎ニ之ヲ定ムヘシ歲出ノ内ニハ年々定テ出スヘキモノアリ又臨時ニ出スヘキモノアリ則通常歲出ト非常ノ歲出トナリ例ヘハ臨時官署ノ修復ヲ爲スノ類又歲出ヲ三等ニ分ツ第一ハ各歲入ト爲ルヘキ物ノ保存費用「ベトリブスコステ」及ヒ取立費用「エルヘーブーリンクズコステ」及ヒ管理費用ナ

リ「ヘルワルツングゴステン」此費用ハ歳入ノ部ヨリ引去リタル
後初メテ其純益ヲ知ルコトヲ得ルナリ茲ニ之ヲ記スル所以ハ議員
ノ保存、取立、管理ヲ監督セシムル爲メニ設ケタルナリ

第二ハ一定ノ年金「トダチヨン」及ヒ一般ノ出金「アルゲマイ子ヒ
ナンツヘルロルツング」(負債ヲ返シ利息ヲ拂フ)ナリ此費用ハ
高ノ已ニ確定スルモノナレハ止々員數ニ相違ナキヤ否ヲ議院ニ
テ検査スルナリ

「ドタチヨン」トハ國王ノ年金及ヒ獨逸國へ出ス金及ヒ國債ノ利
子負債償却高ヲ云ナリ

第三ハ國家行政費用ハ各省ニテ之ヲ定ム則官吏ノ俸給官宅料退
隱料等ナリ

文官ノ退隱料休職料扶助料ハ千六百三十四万八千四百十九「マ
ルク」八十二「ヘニヒ」將來ハ此内ヨリ百七十一万四百十九「マル
ク」八十二「ヘニヒ」ヲ減却スヘシ

千八百七十六年六月廿九日ノ千八百七十七年三月一日ヨリ三月
三十一日マテ三ヶ月ノ會計豫算表ヲ確定シ及ヒ會計年度ヲ定限
スル法律

第一條 會計年度ハ千八百七十七年四月一日ヨリシテ毎年四月
一日ニ始マリ翌年三月三十一日ヲ以テ終ルモノトス
團結及ヒ其他政府ニ屬セサル自治ニ於テ其會計豫算ノ爲メ別ニ
年度ヲ定メ且現今行ハル、會計豫算表ヲ作ルコト及ヒ其決算ヲ爲
スコトニ係ル期日ヲ適宜ニ變スルコトヲ得總テ此規則ニ背クモノハ

廢止タルヘシ

獨逸憲法第七十條 獨逸國ノ支出ハ先ツ前年度ノ有餘金ト海關稅間接稅及ヒ郵便電信料トヲ以テ供スヘシ之ヲ以テ仍ホ不足スルキハ獨逸國稅ヲ取立サル間ハ連邦ノ人口ニ從ヒ徵收スヘキ出金ヲ以テ補フヘシ其高ハ宰相ヨリ會計豫算ニ從テ割付スヘシ

第百條 稅及ヒ其他ノ收入ハ會計豫算表ニ掲クルカ又ハ法律ニ因テ定メタルニ非サレハ政府出納局ニ之ヲ取立ツ可カラス

第百一條 稅ニ付テハ特權ヲ與フ可カラス

從來ノ稅ニ關スル法律ハ改正ヲ爲シ其特權アルモノハ之ヲ廢止スヘシ

第百二條 手数料ハ政府又ハ團結官吏ヨリ止タ法律ニ因テ之ヲ取立

ルコヲ得

歲入ハ二等ニ分レリ一定ノ歲入ト臨時ノ歲入トアリ例ハ政府ノ所有物ヲ販賣スルカ又ハ國債ヲ募ルカ如キハ臨時ノ歲入ナリ一定ノ歲入ニ二種アリ一ハ政府カ一己私人トシテ得ル歲入例ハ政府所有ノ山林田畑等ヨリ得ルカ如シ之ヲ「プレバト」トヴルドシヤフトリヘアインナーメト云フ一ハ政府ノ國權ヲ以テ取立ル歲入ヲ云フ之ヲ「スターツヴルドシヤフトリヘアインナーメト」云フ之ヲ亦二等ニ分ツ一ハ手数料ニシテ一己一人ニ對シテ手数料ヲ爲シタルカ爲メ取立ルモノ例ハ道路橋梁費裁判費用警察官ヨリ證書ヲ交付スル費用ノ類一ハ收稅ナリ國民トシテ一般ノ利益ニ加ハルカ爲メ取立ルモノナリ

一定歳入ノ内政府カ一己私人トシテ取立ルモノニハ第一田畑山林是レハ明カニ政府ノ所有ニシテ田畑ハ之ヲ分割シ貸付ケテ耕作セシメ山林ハ政府自カラ之ヲ監理セリ第二礦山鹽坑及ヒ其他ノ營業ヨリ得ル物例ヘハ磁器或ハ印刷ノ類(現今ハ政府ニテハ精々營業ニ手ヲ入レスシテ人民ニ任カストセリ)第三ゼイハンドルングスインスツユートヨリ得タル利益其業ハ通常銀行ト同シ古ハ普國ニハ普國銀行アリタレモ今日ハ獨逸銀行ト爲レリ獨逸銀行ハ株式會社ヨリ成立ル者ニ類似シテ政府ヨリ多クノ株ヲ持テ之ニ加ハリ事務ヲ監督スルノ權ヲ有セリ第四政府所有ノ鐵道ヨリ入タルモノ現今政府ノ趣意ハ追々私有ノ鐵道ヲ買上クル見込ナリ

國權ヲ以テ取立ルモノ第一手数料則政府カ人民ノ爲メニ爲シタル手数料ヲ取立ルナリ其高ハ政府ノ費シタル高ヲ越ユ可カラス例ヘハ政府カ道路金ヲ取立ルルニハ之ニ費用シタル金額ノ利息ト年々返スヘキ元金高ヲ超ユ可カラス若シ之ヲ越ユルルハ則稅ト爲リ手数料ニ非ス又其手数料ニ二種ノ性質ニヨリ一ハ則國權ヲ以テ爲スコヲ得ル手数料例ヘハ警察官ノ手数料裁判費用(抵當典當ヲ含ム)罰金等ナリ

一ハ一己私人ニテモ其手数料ヲ爲スコヲ得レモ政府ニテ其手数料ヲ引受ケテ爲スルハ一般ノ公益及ヒ耕作等ヲ抄取ラシムルカ爲メ政府ニテ爲スナリ例ヘハ道路錢電信郵便賃等ナリ道路錢ハ今日ハ全ク廢止セリ郵便電信ハ獨逸國ニ移レリ故ニ今日ハ此類ヨリ

取上クル手数料ハ甚タ僅少トナレリ收税ニハ直接ト間接ト二種アリ其意義ノ概畧ハ直接税ハ税ヲ出ス者カ之ヲ負ヒ間接税ハ税ヲ出シタル者ニテ負フコナク他人ニ負ハシメルコナリ此説ハ必シモ何レノ税ニテモ適當スルコトヲ得ス或ハ直接税ニテモ自カラ負ハサルコトアリ或ハ間接税ニモ自カラ負フコトアリ頃口「ホフマシ」氏ノ説ニ從ヘハ間接税トハ財産ノ作動ニ科スルモノニシテ直接税ハ財産所有ニ科スルモノナリ又直接税ハ期限ヲ定メテ取立ルモノナレバ間接税ハ期限ヲ定メテ取立ルコトヲ得ス時々其作動アル毎ニ取レハナリ直接税ニハ三種アリ（土地家屋、分等税、營業者）

第一ノ種類ハ土地及ヒ家屋税、土地税ハ其土地ノ純益ニ從テ之ヲ

科シ家屋税ハ其使用高ニ應シテ科スルモノナリ家屋税ニハ家屋ノ中央ノ明地及ヒ庭園ヲ包括セリ是ノ税ハ千八百六十一年五月廿一日ノ法律ニ因テ改正シタリ

第二ノ種類ハ分等税及ヒ分等收入税ナリ此税ハ一切ノ收入高ニ科スヘキモノニシテ分等税ハ三千「マルク」マテノ收入高ニ應シ百分ノ三以下ヲ科シ分等收入税ハ三千「マルク」以上ノ高ニ應シ通常ハ百分ノ三ヲ科スヘシ

四百二十「マルク」以下ノ收入ニハ税ヲ科セス此税ハ千八百五十一年五月一日ノ法律ニ因テ定メタレバ其後千八百七十三年五月廿五日ノ法律ニ因テ大ニ改正ヲ爲シタリ

第三ノ種類ハ營業税ナリ千八百二十年五月三十日ノ法律ニ定メ

リ其後千八百六十一年七月十九日ノ法律ニテ改正セリ此法律ニ
 從ヘハ何人ニテモ營業ヲ爲ス者ニ都テ稅ヲ科スルニ非ス種類ヲ
 定メテ科スルコト爲セリ此稅ヲ科スル目的ハ一ハ分等收入稅ヲ
 以テハ十分ニ其收入ニ稅ヲ科スルコト能ハサル營業者ニ科スル意
 ナリ例ヘハ豪商ノ營業(銀行ノ類)ノ類一ハ營業ヲ減少セン目的
 ノ爲メニ科スルナリ例ヘハ行商ノ營業稅酒肆等ナリ又營業稅ノ
 内ニ入ルヘキモノニ鐵道稅アリ此稅ハ千八百五十三年五月三十
 日ノ法律ニ因テ定メタルモノニシテ鐵道ノ純益ニ科スルナリ
 間接稅ニ二種アリ一ハ輸出入國境稅ナリ之ヲ管理シ及ヒ取立ル
 コハ各連邦ニテ之ヲ爲シ其費用ヲ引去リタル後其純益ハ獨逸出
 納局ニ差出スヘシ從前ハ國境稅連邦ナル者アリテ各同一ニ取立

タル也今日ハ都テ獨逸國ニ一統シ國境稅ニ關スル法律及ヒ監督
 ノ權ヲ有セリ二ハ國內ノ產物ニ科スル消費物ノ稅則チ鹽、煙草、
 燒酎、麥酒、砂糖、人參(カルタノ印稅)ナリ之モ其費用ヲ引去リタ
 ル後純益ハ獨逸國ニ差出スヘシ三ハ印紙稅(是ハ百五十「マルク」
 以上ノ契約ニ貼用スル稅ナリ十五「ヘニヒ」ヨリ始リ不動産ノ賣
 買ナレハ其代價ノ百分ノ一ヲ取ルモノトス)及ヒ遺囑物ノ稅ナ
 リ(上系下系ニテ相續スルキハ之ヲ取立テス)此二稅ハ全ク普國
 ノ出納局ニ收ルナリ

以上通常ノ歲入ナリ是ノ外非常ノ歲入アリ非常ノ歲入トハ戰爭
 ニ負ケタル國ヨリ勝チタル國ニ償還金ヲ出スコト例ヘハ佛國ヨリ
 普國ニ五十億「フランク」ヲ償還シタルカ如シ又他國ヨリ戰爭ノ

際金額ヲ以テ補助ヲ受クルコト例ヘハ普國ニテ英國ヨリ屢々助金
スツローヂエン
ヲ受ケタルカ如シ又國債及ヒ所有物ヲ賣拂フコトアリ是等ヲ非常
歳入トス

第百三條 政府出納局ノ爲メニ國債ヲ起スコハ止タ法律ヲ以テノミ
之ヲ爲スコヲ得又政府ニテ保證ヲ爲スルモ亦同

國債ヲ起スコハ止タ法律ヲ以テノミ爲ストアリ第六十三條ノ如
ク臨時ニ布告ヲ以テ爲スコヲ得ス此法律ハ理財ニ關スルモノナ
ルヲ以テ第一ニ下院ニ差出スヘシ
政府ノ保證トハ人民ニテ私ニ鐵道ヲ設クルル政府ヨリ其利益ノ
何分アルコトヲ保證スルナリ若シ其保證高ノ利益ヲ得サレハ政府
ヨリ之ヲ償フナリ

英佛ニ於テ國債ヲ起スニハ登記簿ニ登記シテ年額金證書ヲ賣ル
ナリ普國ニ於テハ金額ヲ記シタル公債證書ヲ發行シ何人ニテモ
スターツァアリカチン
之ヲ所有スル者ニ其利子切手ト引換ニ利子ヲ渡スコナリ其所有
者ヨリ政府ニ對シ元金ノ返却ヲ求ムルコトヲ得サレハ政府ヨリ之
ヲ返金スルコトヲ得ルナリ其返金ノ權アルニヘニ復タ其利息ヲ減
スルノ權アリ其利息ヲ減スルニ法律ヲ以テ爲スヘシ然レハ其減
利息ニ不服ナル者ハ元金ノ返却ヲ求ムルコトヲ得此國債ハ年々國
民ヨリ取立ツル稅ヨリ償却シ之ヲ「フンヂールテ」國債ト云フ又
根據アル
「シユエーペンデ」國債アリ（一時借用スルモノナリ）是レハ支出ヲ
淨ヒタル
要スルル未タ歳入ノ納マラサル間臨時歳入アルマテノ國債ヲ募
ルモノナリ其國債ヲ募ルコトハ全ク大藏卿ノ權ニアルモノニシテ

出納局負債證ヲ發行スルナリ其負債ハ短カキ期限ヲ定メ起スヘ
シヤツツァンライスマン
 キモノトス普國ノ千八百八十一年ヨリ八十二年迄ノ會計年度豫
 算表ニ從ヘハ大藏卿ハ三千万マルクマテノ出納局負債證ヲ發
 行スルコトヲ得其期限ハ千八百八十三年一月一日前ニ滿期ト爲ル
 ヘク定メタリ(英國ニテハ銀行ニ一切ニ入レタレハ不足ノキハ
 銀行ヨリ引出セハ此負債ヲ起スヲ要セス)若シ臨時ノ負債ヲ後
 來ノ歲入ヲ以テ償還スルコト能ハサルキ之ヲ通常ノ國債ト改ムヘ
 シ之ヲ「コンソリタチヤン」ト云フ國債ノ管理ハ臨時國債ナレハ
 大藏卿之ヲ掌リ通常ノ國債ナレハ一箇獨立シタル國債掛ニテ之
 ヲ掌リ國債掛ハ千八百二十年一月十七日ノ法律ニ因テ之ヲ設ケ
 千八百五十年二月二十四日ノ法律ニ因テ改正シタリ其職務ハ國

債ヲ總轄シ其利息ノ拂ヒ方及ヒ年々元金償却方ヲ掌ルナリ又
 兩院ハ國債掛ニテ會計豫算表ニ從テ國債ヲ管理ズヘキヤ否ヲ
ハソットヘルツルンツァル
 監督スル爲メ檢査委員ヲ設クヘシ其委員ハ兩院議員ヨリ三人ツ
スマーシムルンツァン
 三年ノ期限ヲ以テ選舉スヘシ會計審査員長カ其長ト爲ルヘシ
ヨベルレヒムンツァン
 此委員ハ何時ナリトモ國債掛ノ帳簿ヲ點檢シ出納ヲ檢閱スルノ
 權アリ又半年毎ニハ必ス之ヲ點閱スヘキ義務アリ國債掛ヨリハ
 毎月ノ末及ヒ一年ノ末ニ精細書ヲ委員ニ差出スヘシ
 政府ノ所有物ヲ賣拂フコト
 所有物ニ二種アリ一ハ行政財産例ヘハ裁判又ハ其器具又ハ兵隊
 ノ屯所又ハ騎兵ノ用馬ノ類是レハ歲入ノ爲メニ設クルニ非スシ
 テ止タ行政ノ爲メニ設クルナリ此財産ヲ賣拂フニハ兩院ノ許可

ヲ要セス然レモ新タニ器具等ヲ設クルモ其賣拂ヒ代價ニテ不足
 スル分ハ固ヨリ兩院ノ允許ヲ得ヘキナリニハ理財財產例ヘハ鐵
 道山林田畑鑛山ノ類ニシテ是ハ歲入ノ爲メニ設ケタルモノナリ
 之ヲ賣拂フニハ議院ノ許可ヲ得ヘキヤ否ニ付キ鐵道ト他ノ財產
 トニ區別ヲ爲スヘシ則鐵道ヲ賣却スルニハ兩院ノ許可ヲ得ヘキ
 一ハ鐵道ノ法律ニ掲ケリ其他ノ財產ヲ賣却スルモ許可ヲ要スル
 ヤ否ハ法律ニモ憲法ニモ其明文ナシ然レモ今日ノ輿論ニ從ヘハ
 議院ノ許可ヲ得ヘキモノトセリ

第四百四條 會計豫算表ニ越エタルモノハ後日兩院ノ許可ヲ得ヘシ
 會計豫算表ヲ越ユルトハ一會計豫算表ニ掲ケサル歲出ヲ爲ス
 二會計豫算表ニ定タルヨリハ餘分ノ高ヲ支出スル一三會計豫算

表ノ何篇何章ニ從テ爲サル支出ヲ云フ(然レモ惣高ハ異ナリ
 ナクモ一定ノ高ヲ越エテ支出スル一ハ仍ホ越エタリト云フ)豫
 算表ヲ越ユル一ニ付テ政府ト議院ト爭論アリ政府ニテハ一二ノ
 場合ニ於ケル豫算表外ノ支出ヲ爲スモノニ限り議院ノ許可ヲ得
 ヘシトセリ議院ハ一二ノ場合ノミナラス三ノ場合ニ於ケル各篇
 各章ニ定メタル高ヲ越エタルモ豫算表ヲ越エタリト看做セ
 リ現ニ其爭ハ千八百七十二年會計審査員ノ設立及ヒ權限ニ關ス
 ル法律ニ因テ決セリ七十二年ノ法律第十九條ニ因レハ普國憲法
 第四百四條ノ會計豫算表ヲ越ユルトハ同第九十九條ニ從テ確定シ
 タル豫算表ノ各篇各章ニ背キ又ハ議院ニテ許可ヲ爲シタル特別
 原稿ノ各章ニ背キ爲シタル一切ノ支出ヲ云フナリ但各章ニ於テ

明カニ此不足ヲ彼ノ多キ所ニテ補フヘシト記載シタルハ此限ニ在ラス此法律ノ原稿(各省ヨリ作テ出シタル原稿ニ因テ作ルナリ)ノ章トハ議院ニ於テ各別ニ決定ヲ爲シ之ヲ豫算表ニ明カニ記シタルモノヲ云フナリ會計豫算表ヲ越エタル及ヒ豫算表外ノ支出ヲ爲シタルハ之ヲ爲シタル翌年ニ開クヘキ議院ニ之ヲ證明シ其許可ヲ得ヘシ

會計豫算表ニ係ル精算ハ會計審査員ニ於テ検査確定スヘシ毎年會計豫算ノ惣精算ハ國債ノ概畧ト共ニ會計審査員ノ意見ヲ付シテ兩議院ニ差出シ政府ノ義務ヲ免カレシムヘシ別ニ法律ヲ發シテ會計検査院ノ編制及ヒ權限ヲ定ムヘシ

會計検査員ノ職務ハ千八百七十二年三月廿七日ノ法律ヲ以テ改

正セラレタリ會計審査員ハ全ク國王ノ直管ニ屬スル者ニシテ諸省ノ卿ニ對シ特立シタル者ナリ検査ニ三種アリ一ハ出入ヲ監督シ二ハ政府財産ノ増減ヲ監督シ三ハ國債ヲ監督スルナリ毎年大藏省ヨリ諸出納局ノ精算書ニ從ヒ且會計豫算表ニ照準シテ特別ノ精算書(豫算表ニ比較シテ精細ニ記載シタルモノ)ヲ作り之ヲ會計審査員ニ差出シ會計審査員ニ於テハ會計豫算表ト比較シテ検査シ其検査證ヲ添ヘテ大藏省ニ返却スヘシ大藏省ニ於テハ會計豫算表ニ從テ總精算書(本條ニ所謂ノ議院ニ出スヘキモノ)ヲ作り再ヒ之ヲ會計審査員ニ差出スヘシ(會計審査員ニテ検査シタル如クナルヤ否ヲ證スル爲メ)會計審査員ハ復々會計豫算表ト比較シテ検査シタル上證書ト意見ヲ添ヘテ更ニ大藏省ニ返却

スヘシ是ニ於テ大藏省ヨリ總精算書ト會計審査員ノ意見トヲ添
ヘ之ヲ議院ニ差出スヘシ議院ニ於テハ會計豫算委員ニ於テ之ヲ
檢査シ議場ニ於テ其委員ヨリ意見ヲ陳述シ政府ノ義務ヲ免カレ
シムヘキヤ否ヲ決スヘシ若シ議院ニ於テ義務ヲ免カレシメスト
決スルモ實際卿ヲ訴フル手續ナケレハ其効ナシ會計審査員ハ裁
判所同様ニ獨立シタル者ナレハ假令僅少ナル不足ヲ發見スルモ
何人ニ向テモ之ヲ返納セシムル權アリ(則佛ノ戰爭間ニモルチ
「ゲイ」カ三十「ヘニヒ」ノ嗅烟草ヲ政府ノ金ニテ買ハセシメタル
ヲ戰爭後ニ返納セシメラレタリ)議院ニ差出スヘキ審査員ノ意
見書ニハ止々數字ノミニ係ルモノカ又ハ政府ノ會計ノ法律ニ協
ヒタルヤ否ニ係ルモノカニ付テハ議院ニ於テ屢々爭ヒアリシ然

ル二千八百七十二年ノ法律第十八條ニ明カニ掲ケリ則憲法第百
四條ニ從ヒ毎年政府ヨリ會計審査員ノ責任ヲ以テ議院ニ差出ス
ヘキ會計精算ノ意見書ハ左ノ各條ヲ記載スヘシ

第一 精算書ニ掲ケタル出入高ノ會計審査員ニテ檢査シタル各
出納局ノ出入精算ト符合スルヤ否

第二 歳入ヲ取立及ヒ之ヲ使用シ又ハ政府ニテ所有物ヲ得タリ
又ハ賣リタリ又ハ之ヲ使用スルル會計豫算表又ハ議院ニテ許可

シタル特別原稿又ハ會計豫算表ニ掲ケタル附記又ハ收入支出ニ
關スル法律又ハ政府ノ所有物ヲ得タリ又ハ賣タリ又ハ使用スル
トニ關スル法律ニ背カサルヤ否

第三 憲法第四條ノ會計豫算表ヲ超タルト并ニ豫算表外ノ支出

カ議院ノ允許ヲ得タルヤ否

第九篇 村里郡縣及七州

第百五條 普魯西國ノ村里郡州ノ代理及ヒ行政ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

通則

第百六條 法律及ヒ布告ハ法律ニ定メタル法式ニ從テ公告シタルキ

ハ其効アリトス

法式ニ從テ公告シタル國王ノ布告ノ効アルヤ否ハ官署ニ於テ之ヲ檢査スルコトヲ得ス止タ兩院ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ルノミ

都テ法律布告ノ効力ハ法律ニ定メタル法式ニ協ヒタルハ其効アリ國王ノ發シタル布告ノ効アルヤ否ヲ檢査スルコトニ付テハ今日

ノ學問上ニ於テハ本條ニ反對セリ其說ニハ裁判官ハ理場ニ臨ミ國王ノ布告カ兩院ノ允許ヲ得ヘキ事件ナルヤ否ヲ檢査スルコトヲ得ヘシトセリ例ヘハ國王カ租稅ニ關スル布告ヲ發シ之ニ背ク者ハ印紙料ノ何倍ヲ以テ罰スヘシトスルカ如キハ裁判官ニ於テ其事件ノ憲法ニ從テ兩院ノ允許ヲ得ヘキモノナルヤ否ヲ檢査スルコトヲ得ルトセリ然レモ本條ニ於テハ全ク之ニ反シテ其檢査ハ止タ兩院ニ於テ爲スコトヲ得ルノミ然レモ議院ニ於テ兩院ノ允許ヲ得ヘキ事件ト決シタルモ實際其効ナシ何トナレハ諸省ノ卿ヲ訴フルコトヲ得サレハナリ

第百七條 憲法ハ通常ノ立法手續ヲ以テ改變スルコトヲ得之ヲ改變スルキハ各院ニ於テ兩度多數ヲ以テ可否ヲ決ス可シ但其間ニハ二

十一日間ノ猶豫アルヘシ

他國ノ憲法ニ因レハ憲法ハ法律ノ基礎ト爲ルヘキ緊要ノモノナ
レハ容易ニ之ヲ變スルコト能ハサルモノトセリ則其可否ハ三分ノ
二ノ多數ヲ要シ或ハ四分ノ三ノ多數ヲ要セリ普國ニ於テハ一般
ノ法律ト區別セスシテ通常ノ手續ヲ以テ改變スルコトヲ得レ止
タ兩度可否ヲ決スルコトセリ

又憲法ニ抵觸スヘキ法律ヲ發セントスルニハ先ツ第一ニ憲法ノ
箇條ヲ改正シ後ニ法律ヲ發スヘシ則普國ニテ宗旨ニ關スル法律
ヲ發セシキニ豫メ憲法第十五條第十六條ヲ廢シタル後發シタル
カ如シ又ハ他ノ法律ヲ以テ憲法ヲ改正スルコトアリ然ルキハ其法
律ハ亦本條ニ從テ兩度可否ヲ決スヘシ例ヘハ北獨逸連邦ノ憲法

ヲ以テ普國ノ憲法ノ箇條(裁判法ノ部又ハ四十八條ノ類)ヲ廢シ
タルカ如シ其北獨逸連邦ノ憲法ヲ再度可否ヲ決セシカ如シ

第百八條 兩院ノ議員及ヒ政府ノ官吏ハ國王ニ對シ忠節從順ニシテ

且憲法ヲ遵奉スルノ誓約ヲ爲スヘシ

軍人ハ憲法ヲ遵奉スルノ誓約ヲ爲スニ及ハス

其誓約ハ

天帝ノ輔翼ヲ以テ普魯西國王ノ臣下タル吾輩カ國王ニ忠節從順
ニシテ職務上ノ義務ヲ眞心ヲ以テ竭シ又憲法ヲ遵守センカ爲メ

茲ニ誓約ス

天帝我ヲ翼ケヨ

ソノワケルミヤクゴツトフモノハ

軍人ナルトハ

普國憲法四

水ニアリトモ陸ニアリトモ國王ニ忠節順從云云ト誓約スヘシ
第九條 從來ノ租稅其他ノ收入及ヒ一切ノ法律布告ノ此憲法ニ抵
觸セサルモノハ法律ニ因テ改正スルマテハ之ヲ取立ツルヲ得且其
効ヲ有スヘシ

本條ハ二様ノ意義ヲ含メリ一ハ憲法ヲ發スル前後ノ法律ノ關係
ヲ定ムルモノニシテ元來舊法ヨリ新法ニ移ル規則ノ分ニ掲クヘ
キモノナリ則新ニ法律ヲ發シテ改正スルマテハ舊ノ法律ノ効ア
ルコトハ言フコトヲ俟タス二ハ議院ニテ歲入ヲ許可スル權ヲ制限ス
ルノ意ナリ故ニ佛國革命ノ時ニ設ケタル憲法ノ如ク都テ歲出入
ハ毎年議院ニ於テ之ヲ許可スヘキモノトスルハ此憲法ノ趣意ニ
戻ルモノトス何トナレハ政府ニテ歲入アルモノヲ歲出ス可カラ

ストスルノ道理ナケレハナリ假令議院ニ於テ歲出ヲ拒ミタル時
ト雖モ政府ハ從來ノ法律ニ從フカ又ハ國家ノ成立ニ欠ク可カラ
サルモノハ獨斷ヲ以テ支出スルコトヲ得

第十條 都テ從來ノ法律ニ因テ定メタル官署ハ其編制法ヲ發スル
マテハ其儘事務ヲ掌ルヘシ

官署ノ編制法ヲ發スル權ハ施政權(四十五條見合)ノ一部ナレハ
國王ニ屬スル者ナリ已ニ法律ニ因テ成立タル官署ヲ改正セント
スルニハ亦法律ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

然レモ法律ニ從ハサル官署ヲ改正スルカ又ハ新ニ官署ヲ設クヘ
キ場合ニ於テハ國王ヨリ布告ヲ發シテ之ヲ爲スコトヲ得レモ其編
制ニ付歲出ヲ要スルモノハ勿論議院ノ許可ヲ要スヘキモノナレ

ハ自カラ議院ノ制限ヲ受クルナリ

第百十一條 戰時又ハ内亂ノ際ニ於テハ公安ヲ害スヘキ恐レアレハ

其時間及ヒ地方ヲ定メテ憲法ノ第五條第六條第七條及ヒ第二十七條ヨリ第三十條マテ及ヒ第三十六條ノ効力ヲ停止スルヲ得其詳細

ハ別ニ法律ヲ發シテ之ヲ定ムヘシ

其法律ハ千八百五十一年六月八日ニ籠城規則ヲ發セリ又普國王

ハ獨逸帝トシテ此規則ニ從ヒ獨逸國內ニ於テモ籠城ヲ公告スル

權アリ

獨逸憲法第六十八條 獨逸國內ニ於テ公安ヲ害スルノ恐アルキ

ハ皇帝ハ其一地方ニ對シ籠城ノ公告ヲ爲スコトヲ得其公告ノ事由

法式効ヲ定ムル法律ヲ發スルマテハ千八百五十一年六月四日ノ

普國籠城公告規則ヲ適用スヘシ

舊法ヨリ新法ニ移ル爲メノ規則

第百十二條 第二十六條ニ預定シタル法律ヲ發スルマテハ學校教育

事件ニ付テハ從來ノ規則ニ從フヘシ

第二十六條ニ定メタル法律ハ今日仍ホ未タ發セス 普國ニ於テ

ハ學校教育事件ハ盡ク布告ヲ發シテ之ヲ定メタルモノナレハ其

時ノ卿ノ意ニ因テ編制スルコトヲ得タリ是レ實ニ一公典ト謂フヘ

シ例ヘハ前ノ文部卿「フハルプ」ト云フ人ハ自由黨ニ屬スル人ニ

シテ學校ノ教育ヲ宗派ノ違ニ關セス之ヲ一般ニ定メタリ歴史ハ

「カトリク」宗ノ歴史ニモ非ス又「プロテスタント」ノ歴史ニモ非ス

純粹ノ歴史ヲ教ヘタリ文學ニ於テモ亦同ク宗派ニ關セス教ヘタ

り止々宗旨ノ教育ノミ宗派ニ從テ教育セリ則如此宗旨ニ關係セ
 スシテ教育スル學校ヲ宗派同シムル等學校ト云フ現今ノ文部卿プツ
 トカンメルト云フ人ハ全ク前卿ニ反シテ次第ニ宗旨ニ關係ヲ生
 セシメントスルカ如シ前卿「ブハルプ」ノキハ一般ノ學校教育法
 ヲ設ケテ之ヲ施行セントシタレト大藏卿ニテ其出費ヲ拒ミタル
 ト國王ノ之ヲ欲セサルトニ因テ其説ハ遂ニ行ハレサリシナリ復
 タ當今ノ文部卿カ之ニ反シタル法律ヲ設ケントスルモ恐クハ議
 院ノ承諾ヲ得ルコト能ハサルヘシ故ニ普國ニ於テ政府ト議院カ全
 ク自由黨ニ屬スルカ又ハ舊守黨ニ屬スルマテハ其法律ヲ設クル
 コト能ハサルヘシ
 未タ法律ノ設ケアラサル所ノ弊ハ種々アリ例ヘハ現今普魯西國

ニ於テ「ギムナ―ヂユム」ト「レヤールシユ―レ」トノ間ニ其説一定
 セス「ギムナ―ヂユム」ニテハ專ラ古代ノ學問例ヘハ「ギリキ」羅
 馬ノ文學ヲ教ヘ「レヤールシユ―レ」ニ於テハ專ラ窮理學又ハ新
 代ノ文學例ヘハ伊太利語佛語英語等ヲ教フ故ニ「レヤールシユ
 ―レ」ノ卒業生ハ醫學法學ヲ學フニ足ル學問ノ豫備ナシト云フ
 者アリ又ハ其豫備アリト云フ者アリテ其説一定セス是レ法律ノ
 ナキカ故ナリ止々當時ノ卿ノ意ニアルノミ

第百十三條 刑法ヲ改正スルマテハ言語文書印刷物又ハ畫圖ニ因テ
 犯シタル輕罪ハ別ニ法律ヲ發シテ之ヲ定ムヘシ

千八百七十四年五月七日ノ獨逸出版條例ヲ參看スヘシ

第百十四條 千八百五十六年四月十四日ノ法律ニ因テ廢セラレタリ

新ニ村里規則ヲ發スルマテハ警察事務ハ舊來ノ法律ニ從フヘシ

第百十五條 第七十二條ニ預定シタル選舉規則ヲ發スルマテハ千八

百四十九年五月三十日ノ兩院議員選舉布告ニ從フヘシ

第七十二條ニ定メタル選舉規則ヲ發スルマテハ千八百四十九年

ノ布告ニ從フヘシトアリ未タ選舉規則ヲ發セサレハ今日モ仍ホ

四十九年ノ布告ニ從フナリ其布告ハ已ニ第七十條ニ記セリ

第百十六條 現今成立スル二箇ノ最上等裁判所ハ一箇ニ合併スヘシ

其編制ハ別ニ法律ヲ發シテ定ムヘシ

本條ノ意ハ二最上裁判所ハ一最上裁判所ニ合併スヘシトアリ古

ヘハ「ライン」近傍ノ爲メ大審院^{カザン}アリ其他ノ地方ノ爲メニハ最上

等裁判所アリ其後之ヲ廢シタルモ復タ千八百六十六年ノ後ニ新

タニ畧取シタル地方ノ爲メ「ラ」^{ベル}アペラチヤンスダグリヒト」

最上等裁判所

ヲ設ケリ前司法卿ハ最上等裁判所此兩裁判所ヲ合併シ又今日ニ

至テハ新裁判所編制法ニテ大審院ト爲レリ

第百十七條 此憲法頒布前ニ任セラレタル政府官吏ノ權利ニ付テハ

官吏ニ關スル規則ヲ發シテ其權ヲ防護スヘシ

其事柄ハ此憲法ヲ頒布スル前ニ任命セラレタル官吏ノ權利ハ官

吏規則ヲ發スル時ニ之ヲ注意スヘシト掲クルナリ其規則ハ未タ

發セス(獨逸全國ノ爲メニハ千八百七十三年三月三十一日ニ官

吏權利職務規則ヲ發セリ)

第百十八條 獨逸國ノ爲メ千八百四十九年五月廿六日ノ草案ニ因リ

決定シタル獨逸憲法ヲ頒布スルニ因リ此憲法ヲ改正スヘキハ國

王ヨリ之ヲ定メ後會ノ議院ニ通知スヘシ兩院ハ臨時ノ改正布告ノ
獨逸憲法ニ抵觸セサルヤ否ヲ議決スヘシ

千八百四十八年ニ獨逸全國ノ代言人ノ「フランクホルト」ニ集議
シテ獨逸國ノ憲法ヲ設ケントシタリ然レモ之ヲ設クルコト能ハサ
リシナリ其事柄ハ此憲法ニ於テ若シ獨逸國ノ憲法ノ創立スルキ
ハ之カ爲メ普國憲法中ノ箇條ヲ廢スヘキモノアラン然ルキハ國
王ハ其改正スヘキ箇條ヲ定メテ布告シ之ヲ後會ノ議院ニ通知ス
ヘシト掲ケタルナリ

第一百十九條、第五十四條ニ掲ケタル國王ノ誓約及ヒ兩議院ノ議員官
吏ノ誓約ハ此憲法ヲ審查シタル後直ニ其誓約ヲ爲スヘシ

千八百四十八年ニ内亂ノ起リタルカ爲メ國王ハ特權ヲ以テ憲法
ヲ作り他日兩院ヲ開テ改正セシムル約定ヲ以テ布告シタリ本條
ニハ議院ニテ改正シタル後ハ其憲法ニ從テ國王兩院議員諸官吏
ハ誓約ヲ爲スヘシト決セリ

第七 獨乙帝國官員權利義務規則

千八百七十三年三月三十一日ニ發シタル規則

天帝ノ輔翼ヲ以テ獨乙國ノ帝及ヒ普魯西國ノ王タル（ツイルレム）ハ
上院下院ノ允許ニ因リ獨乙國ノ各ヲ以テ左ノ條々ヲ確定ス

第一條 此規則ニ於テ帝國官員ト稱スル者ハ帝ヨリ任スルカ又ハ憲
法ニ從テ帝ノ命令ニ從フヘキ義務ヲ有スル者ヲ云フ

第二條 始メ任スル時明カニ備ノ各義ヲ以テ命セサル者ハ總テ終身
官トス

第三條 總テ官員ハ其職務ニ就ク以前ニ其職務ノ義務ヲ盡ス可キ
ヲ誓約ス可シ

第四條 總テ官員ハ任命ノ時ニ辭令書ヲ受ク可シ

其俸給ヲ受クル權ハ別段ノ定メナケレハ其職ニ就キシヨリ始マル者トス其後増給ヲ命シタルハ其日ヨリ始マル者トス

第五條 俸給ハ一ヶ月ツ、毎月始メニ之ヲ給スヘシ然レモ上院ハ或ル官員ニ三箇月ツ、前以テ給スルコトヲ定ムルヲ得

此規則ヲ發スルマテ三箇月ツ、前以テ給セシ官員ハ一等昇級スルマテハ仍ホ三箇月ツ、ヲ以テ給スヘシ

第六條 官員ハ俸給、退隱料、休職料、ヲ他人ニ讓與賣買又ハ抵當ニ入ル、ニハ是等ニ付財産取押ヲ爲シ得ヘキ分ノミ讓與賣買抵當ニ入ル、コトヲ得

是等ヲ支給スヘキ出納局ハ公ケノ證書ヲ受取タル上ニテ之ヲ給付

スヘシ

第七條 俸給豫算表ニ定メタル職務ヲ奉スル官員ノ死後ニ其寡婦又

ハ正當ノ子ヲ遺シタルハ是等ノ爲メ死後ノ翌月ヨリ三月分ノ俸

給ヲ給スヘシ但此規則ヲ發スル以前又ハ職務ニ任スル以前ニ別ニ

約定アリテ之ヨリ多ク受クヘキハ格別ナリトス此俸給ニハ其官

員ニ給セシ交際費ヲ含蓄スヘシ其交際費トハ其官吏ノ立替金ヲ償

フモノヲ云フニ非ス其三月分ノ俸給ヲ何人ニ給スヘキヤハ其長官

之ヲ定ムヘシ又其俸給ハ財産取押ノ爲メ之ヲ取押フルコトヲ得ス

第八條 前條ニ掲ケタル者ヲ死後ニ遺サスト雖モ其兩親兄弟姉妹及

ヒ兄弟ノ子又ハ養ヒ子ヲ保養スヘキ義務アルニ其財産ヲ遺サ、ル

カ又ハ死前ノ雜費醫藥埋葬料ヲ拂フコト能ハサルハ上等官署ノ許

可ヲ以テ三月分ノ俸給ヲ給スルコヲ得

第九條 死去シタル官員ノ官宅ハ死後翌月ヨリ三ヶ月マテハ其家屋

ニ住居セシムヘシ

其官員ノ家屬ナキハ其遺留財産ヲ受クヘキ者ヨリ死後三日内ニ

其官宅ヲ引渡スヘシ

此場合ニ於テハ書齋及ヒ接對部屋並ニ總テ公用ニ供セシ部屋ハ直

チニ之ヲ引渡スヘシ

第十條 總テ官員ハ憲法及ヒ法律ニ從テ正直ニ其任セラレタル職務

ヲ擔當シ職務ノ内外ニ於テ其品行ヲ正シクシ其職務ヲ汚カサ、ラ

シムヘシ

第十一條 官員タル者ハ其職務上ヨリ知り得タル事件ヲ其職務中ハ

勿論其職務ヲ止ムルト雖モ之ヲ他ニ漏洩ス可カラズ但其事件ニ因

リ自ラ秘密ニス可キ者ト又ハ長官ヨリ秘密ニスヘキコヲ命シタル

者トニ拘ハラズ

第十二條 官員ノ裁判所外ニ於テ鑑定人トナリテ其意見ヲ述フルニ

ハ前以テ長官ノ許可ヲ受ヘシ

又官員ハ職務ヲ止メタル時ト雖モ秘密ニスヘキ事件ノ爲メ證據人

タルコヲ拒ムヘシ但其長官又ハ先キノ長官タリシ者ヨリ許可アリ

シハハ格別ナリトス

第十三條 官員タル者ハ法律ヲ遵奉シテ其職務ヲ掌サトルノ責任ア

ル者トス

第十四條 官員ノ休暇及ヒ休暇中ノ代理ニ付テハ帝ヨリ規則ヲ發シ

テ之ヲ定ムヘシ

疾病又ハ休暇ノ許可ヲ得スシテ其職務ヲ離ル、トヲ得ヘキ場合ニハ其離ル、時間ノ俸給ヲ扣除セス

代理費用ハ獨乙國出納局ニテ之ヲ辨スヘシライヒンツキ休暇ノ許可ヲ受ケズシテ其職ヲ離ル、カ又ハ休暇期限ヲ經過シテ仍ホ其職ヲ離ル、者ハ其時間ハ俸給ヲ受クルトヲ得ス

第十五條 帝ヨリ任シタル官員カ他國ノ王又ハ政府ヨリ尊號、勳章、贈與、俸給、手當金ヲ受クルニハ帝ヨリ其許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ受クルトヲ得ス

官員ハ其職務ニ關シテ贈與又ハ賞與ヲ受クルニハ上等官署ヨリ其許可ヲ得可シ

第十六條 官員ハ前以テ上等官署ノ許可ヲ得ルニ非レハ他ノ職ヲ兼務シ及ヒ片手ニ手當料ヲ得テ他ノ事務ヲ爲ストヲ得ス又營業ヲ爲ストヲ得ス又官員ハ利益ノ爲メニ設クル會社ノ頭取管理者監督者ト爲ルニハ許可ヲ得ヘシ但直接間接ニ手當料ヲ得ルトハ其許可ヲ爲ス可カラス

其爲シタル許可ハ何時タリトモ之ヲ取上グルトヲ得
選舉シタル領事及ヒ休職セラレタル官員ニハ本條ヲ適用ス可カラス

第十七條 官員ノ尊號及ヒ等級大禮服ハ帝ヨリ布告ヲ發シテ之ヲ定ムヘシ(千八百十七年二月七日ノ布告ヲ見ルヘシ)

第十八條 官員ノ住所地方外ニ出テ事務ヲ行フト其日當及ヒ馬車汽

車賃並ニ轉職ノ時其轉住料等ノ金高ハ帝ヨリ上院ト協議シタル上
布告ヲ發シテ之ヲ定ムヘシ

第十九條 現ニ奉職スル官員及ヒ退職セシ官員ノ權利義務ニ付テ獨
乙國ノ法律ヲ以テ未タ之ヲ定メサル者ハ其官員ノ住居スル地方ノ
法律ニ從フヘシ其連邦外ニ住居スル官員ノ權利義務ニ付テハ本國
ノ法律ニ從フヘシ(第二十一條)若シ本國ノナキハ普魯西國ノ法
律ニ從フヘシ

連邦ノ法律ニ從テ官員ノ死去後寡婦及ヒ其相當ノ子ニ給シタル退
隱料又ハ救恤料其他贈與金ニ租稅ヲ減スルニ付キ特別ノ權ヲ與ヘ
タルハ獨乙國官員ト爲リテ死去シタル時(政府又ハ公ケノ貯蓄
所ヨリ)退隱料救恤料其他贈與金ヲ與ヘタルハモ亦同ク其特權ヲ

與フヘシ

第二十條 第一官員死後ノ遺留物ヲ封印スルコトニ付キ第二家資分散
ノ際ノ特權又ハ其官員ノ擔當セシ出納局ニ又ハ其他財産管理上ニ
不足ヲ生セシハモ亦其官員ニ對シ住居スル連邦ノ法律ヲ以テ處分
スヘシ

帝國官署ニテ有スヘキ權利ハ其官吏所屬ノ連邦ノ官署ノ有スルト
同一ノ權ヲ有スヘシ

第二十一條 官員ノ外國ニ住居スル者ハ其管轄裁判所ハ本國裁判所
ノ管轄ニ屬スヘシ本國ニテ管轄スヘキ裁判所ナキハ本國ノ都府
ノ裁判所ヲ管轄トス本國ノナキハ伯林ノ始審裁判所ニテ管轄ト
ス若シ都府ノ多クノ裁判管轄區ヲ分チタルハ司法省ヨリ布達ヲ

爲シテ管轄裁判所ヲ定ムヘシ

選舉シタル領事ニハ本條ヲ適用ス可カラス

第二十二條 獨乙領事ノ裁判權ヲ有スル國內ニ官員ノ職務上ノ住居

ヲ有スルキハ其官員ハ亦千八百六十七年十一月八日ノ法律ニ從テ

領事裁判權ニ屬スヘシ

第二十三條 俸給豫算表ニ定メタル俸給ヲ受クル同等ノ官ヨリ他ノ

同等ノ官ニ轉住料ヲ給シテ轉職スルキハ其轉職ノ職務上ヨリ已ム

ヲ得サル場合ニハ苦情ヲ申立ルコトヲ得ス其轉職ノ場合ニ兼務ヲ失

フカ又ハ其地方ニ付特ニ別段ノ手當アル者ヲ失フカ又ハ職務上ノ

費用金トシテ得タル者カ其費用ノアラサルカ爲メ費用金ヲ失フキ

ハ是等ヲ以テ俸給ノ減シタルト看做ス可カラス

第二十四條 官制變革ノ爲メ其官署ヲ廢シ其職務ヲ失フタル者ニハ

規則ニ從ヒ休職料ヲ給シテ一時休職セシムルヲ得

第二十五條 前條ニ掲ケタル場合ノ外ニ帝ヨリ何時ナリトモ休職料

ヲ給シテ左ニ掲クル官員ヲ休職セシムルコトヲ得

宰相、宰相局長、海軍局長、外務局大輔、宰相局副長、現今ニテハ内務

省ヒヒシカシ計檢査局、銀行局、鐵道管理局、郵便局、司法局及ヒ會

局ノ分課及外務局及ヒ省ノ長及ヒ課長

外務局ノ書記官及ヒ俸給豫算表ニ定ムル輔佐人、陸軍、海軍ノ「イン

テンダント」公使領事

第二十六條 休職料ハ百五十「ターレル」未滿ノ俸給ヲ得ル者ニハ其

全額ヲ給シ百五十「ターレル」以上ノ俸給ヲ得ル者ニハ俸給四分ノ

三ヲ給スヘシト雖モ百五十「タール」ヨリ少カル可カラス
休職料ノ年額ヲ定ムルキニ「タール」以下ノ零數ヲ生スルキハ之
ヲ一「タール」ト算用スヘシ

休職料ノ年額ハ三千「タール」ヲ越ユルコヲ得ス

第二十七條 休職料ハ俸給ト同ク前以テ之ヲ拂フヘシ其休職料ヲ拂
フヘキ期限ハ休職ノ命令及ヒ金高ヲ本人ニ通知シタル翌月ヨリ三
ヶ月ヲ經テ始マル者トス但俸給ヲ拂フコトハ直ニ止ムヘシ

第二十八條 一時休職セシ者ハ第二十三條ニ於ケルカ如キ苦情ヲ申
立ツルコトヲ得サル場合ニ於テハ其學力ニ應スル職務ヲ受クルノ義
務アリ若シ之ヲ肯セサレハ休職料ヲ失フヘシ

第二十九條 休職料ヲ受ケヘキ權利ハ左ノ場合ニ於テ失フ者トス

第一 獨乙國官員ニシテ從前受ケタル俸給ヨリ少カラサル俸給ヲ
受ケヘキ官ニ再任セラレタルキ

第二 其官員ノ獨乙國民權ヲ失ヒタルキ

第三 宰相ノ許可ナクシテ獨乙連邦外ニ住居スルキ

第四 免職セララル、キ

第三十條 休職セシ者カ獨乙國又ハ連邦ノ官員ニ再任セラレ俸給ヲ
受クルキハ休職料ト俸給トヲ合算シ其金高カ從前ノ俸給ヨリ越エ
タルキハ越エタル分ノ休職料ヲ停止スヘシ若シ再ヒ任セラレタル
職務カ一時日當ヲ受クヘキモノナルカ又ハ慰勞金ヲ受クヘキモノ
ナルキハ其後六箇月間ハ休職料ノ全額ヲ給スヘシ然レモ七箇月ヨ
リハ以上ノ高ヲ給スヘシ

第三十一條 一時休職セラル、者ノ死去シタル後其遺族ニ仍ホ三箇月分ノ休職料ヲ給スルコトハ第七條第八條ノ規則ニ從フヘシ

第三十二條 見習又ハ備ヲ以テ任シタル官吏ヲ免スルコトハ最初其者ヲ任シタル官署ヨリ之ヲ爲スヘシ

第三十三條 曾テ辭職セシ者ナルヤ又ハ免職セラレシ者ヲ再用スルニハ上等官署ノ許可ヲ要スヘシ

第三十四條 獨乙國ノ出納局ヨリシテ俸給ヲ受クル官員ノ少クモ十年ヲ勤メタル後身体ノ不具トナルカ又ハ身体精神ノ衰弱シテ續テ其職ヲ奉スルコト能ハサルニ至リ之カ爲メ退隱シタルハ其出納局ヨリ終身退隱料ヲ給スヘシ

第三十五條 宰相宰相局ノ長海軍局長外務大輔ハ其職ヲ奉スルコト能

ハサルニ非サルモ何時タリトモ其職ヨリ退カシムルカ又ハ自カラ辭職スルコトヲ得此場合ニ於テ少クモ二年間奉職セシハ退隱料ヲ給スヘシ但退隱料ノ最少數ハ俸給ノ四分ノ一其他ハ此規則ニ定ムル退隱料ニ從フヘシ

第三十六條 總テ官員ハ其過誤ニ非スシテ職務上ヨリ疾病重傷其他創傷ヲ受ケテ職ヲ奉スルコト能ハサル場合ハ十年以内ト雖モ退隱料ヲ給スヘシ

第三十七條 備ヲ以テ命シタル者ハ俸給豫算表ニ掲ケタル職務ヲ勤ムルニ非サレハ退隱料ヲ給セス
但俸給豫算表ニ掲ケサル者ト雖モ時宜ニ因リ此規則ニ定メタル退隱料ヲ給スルコトヲ得

第三十八條 片手ニ職ヲ勤ムルカ又ハ明カニ時間ヲ定メテ任シタルカ又ハ其職務ノ一時ニ限リタル者ナルハ此規則ノ退隱料ヲ給セス其職務ノ片手ニ勤ムルヲ得ヘキ者ナルヤ否ハ其職ニ任スルハ其長官ニテ之ヲ定ムヘシ

第三十九條 第三十六條ニ掲ケタル場合ノ外十年以内ニ其職ヲ勤ムルコト能ハサルニ至リ退隱シタル者ノ貧窮ナルハ上院ノ決議ニ因リ一時又ハ終身退隱料ヲ給スルコトヲ得

第四十條 外國ニ在勤スル官員ノ退隱スルカ又ハ一時休職セシムルハ其者ノ獨乙國ニ歸リ其住所ニ着クマテノ轉住料ヲ給スヘシ

第四十一條 十年以上十一年以内ニ退隱シタル者ニハ俸給八十分ノ二十ノ退隱料ヲ給シ十一年以上ハ一年毎トニ第四十二條ヨリ第四

十四條マテニ定メタル俸給ノ八十分ノ一ヲ増加スヘシ然レモ退隱料ハ俸給ノ八十分ノ六十ヲ越ユルコトヲ得ス

第三十六條ニ掲ケタル場合ニ於テハ八十分ノ二十ヲ給シ第三十九條ニ掲ケタル場合ニ於テハ八十分ノ二十ヲ越ユルコトヲ得ス

退隱料ヲ計算スルニハ零數ハ「ターレ」ト算用スヘシ
第四十二條 退隱料ヲ計算スルニハ交際費職務費用ヲ除キ其他俸給ニ算入スヘキコト左ノ如シ

第一 官宅及ヒ官宅料薪炭膏油穀物秣草等並ニ公用地ノ收入高是等ノ價カ俸給豫算表ニ於テ俸給ノ一分トシテ掲ケタルカ又ハ俸給ニ算用スヘシト別ニ掲ケタルハ

第二 俸給トシテ受クヘキ者ニ其價ニ高低アル物ハ俸給豫算表ニ

掲ケタル價格ニ從フヘシ若シ豫算表ニ掲ケサルハ始メ約東シタル價ニ從フヘシ若シ其約束ナキハ三年間ノ平均ヲ取り其價ヲ定ムヘシ

第三 取立高ノ部合例ハ橋梁ノ番人トナリテ通行錢ヲ取委員手數料一時委員ヲ組ミ共手數料臨時ノ手數料賞與物等例ハ多ク上ル時一時共一時ニ係ルモノハ算入ス可カラス官吏ニ贈物スルコト

第四 旅宿賄料ヲ得ル權アル軍屬ニ於テハ中等ノ賄料ヲ俸給ニ算入スヘシ

第五 俸給ニ算入ス可キ物ヲ合算シタル價格カ其職務相當ノ俸給ノ最上高例ハ書記官ハ何圓ヨリ何圓ヲ越ユルコト得ス但前官ノ俸給ニ充タシムルカ爲メ退隱料ヲ得ル權ト共ニ與

ヘタル増加額ハ其全額ヲ算入スヘシ

第六 此規則ニ從テ合算シタル金高ノ四千「タ」レル以上ニ至リタルハ其以上ノ分ハ半額ヲ俸給ニ算入スヘシ
一時休職シタル官員ノ退隱料ハ先キニ得タル俸給ニ從テ計算スヘシ

第四十三條 前官ノ俸給カ後官ノ俸給ヨリ多クシテ少クハ前官ヲ一年間勤タル官員ハ其請求ニ因ルカ又ハ第七十五條ニ定メタル罰則ニ從テ轉任シタルニ非サレハ前官ノ職務期限ニ後官ノ職務年限ヲ算入シ前官ノ俸給ニ應スル退隱料ヲ給スヘシ但其退隱料ハ後官ノ俸給ヲ越ユ可カラス

第四十四條 兼務又ハ片手ニ事務ヲ兼勤スル者ハ其兼務カ俸給豫算

表ニ掲クル官名ニ非ザレハ退隱料ヲ受クルコトヲ得ス

第四十五條 職務期限ハ始メ職ニ就クモ誓約ヲ爲シタル日ヨリ起算

スヘシ然レモ職ニ就キタル後ニ誓約ヲ爲セシコトヲ證據立ルモハ職

ニ就キシ日ヨリ起算スヘシ

第四十六條 職務期限ヲ起算スルニハ左ニ掲クル年月モ算入スヘシ

第一 休職料ヲ受ケテ一時休職セシ年月

第二 連邦又ハ連邦ニ屬スル土地ノ政府ニ奉職セシ年月

第三 軍人ノ一時見習ノ爲メ獨乙國又ハ連邦ニ屬スル土地ノ政府

ノ武官ニ奉職セシ年月

第四 獨乙國又連邦ノ職務ヲ奉スル前ニ技藝熟練ノ爲メ實地ニ事

務ヲ行フヘキコトヲ試験規則ニ定メタルモハ其實地ニ事務ヲ

行ヒタル年月

第二ノ場合ニ於テ其職務年限ハ獨乙國ノ官員ノ職務年限ヲ計算スル規則ニ從テ之ヲ計算スヘシ

第四十七條 文官ノ職務年限ヲ計算スル時武官タリシ時ノ年月日モ

算入スヘシ

第四十八條 十八歳以前ニ勤メタル職務年限ハ之ヲ算入セス

然レモ戰時及ヒ出陣ノ際又ハ後備軍ト爲リテ勤メタル年月ハ年齢

ニ拘ハラヌ算入スヘシ

戰時トハ出兵ヲ命シタル日ヨリ平定ノ日マテヲ云フ

第四十九條 敵國ト戰爭ノ際獨乙國ノ陸海軍ニ加ハリ若クハ連邦ノ

兵ニ加ハリテ敵兵ト對陣シタルカ又ハ出兵ニ加ハリテ戰場マテ行

キタルカ又ハ軍艦船舶ニ乗込ミタル文官ハ職務年限ノ外ニ一年ヲ増加シテ計算スヘシ

前項ノ戰爭トハ如何ナル場合ヲ指スカ及ヒ戰爭ノ續キタル年ハ一年以上ヲ算入スヘキ者ナルカハ其都度帝ヨリ之ヲ定ム可シ此規則ヲ發スルヨリ以前ニ戰爭ニ加ハリタル者ハ各連邦ノ規則ニ從フヘシ

第五十條 軍人ノ戰時ニ在テ城寨禁囚又ハ敵兵ニ虜囚セラレ、時間ヲ職務年限ニ算入スヘキコトニ付テハ獨乙國陸海軍人ノ退隱料規則ニ從テ之ヲ計算スヘシ

第五十一條 公使並ニ其附屬官吏又ハ俸給ヲ受クル領事及ヒ其屬官ハ歐羅巴外ノ國ニ於テ一年以上奉職スル者ハ東亞細亞、中亞細亞、

及ヒ南亞米利加ニ奉職スル年限ハ退隱料ヲ計算スヘキ其年限ヲ二倍ニ計算スヘシ

前項ノ外ノ歐羅巴外ノ國ニ奉職スル者ノ爲メニハ上院ノ決議ニ因テ前項ニ適當スル規則ヲ發スヘシ

第五十二條 上院ノ許可ヲ以テ第四十五條ヨリ第四十九條マテノ規則ニ從ヒ左ニ掲クル時間ヲ官吏職務年限ニ算用スルコトヲ得

第一内外國ニ於テ公證人、代言人ヲ勤メシ時間、村、寺門、學校、ニ勤メ

シ時間、連邦ノ王室ニ勤メシ時間

ハツスヘルウツンク

第二外國政府ニ奉職セシ時間

第三慣習ニ因テ直接官吏ト爲ル以前ニ實地經驗ヲ要スルハ獨乙國又ハ連邦ノ官吏ト爲ル前ニ實地經驗ヲ爲セシ時間

第五十三條 退隱願ヲ出シタル官吏ノ其職務ヲ勤ムルヲ能ハサルヲ證スルニハ其官吏ノ長官ヨリシテ將來續テ其者ノ事務ヲ奉スル能ハサルヲ述フルヲ要ス

其他ノ證據ヲ要スルヤ否又長官ノ申立ニ反對シタル證據ヲ十分ナリトスルヤ否ハ退隱ヲ裁定スヘキ官署ノ意見ニ任スヘシ

第五十四條 退隱料ヲ願出シタル者ニ其願ヲ聞届クヘキカ又ハ何日ヨリシテ退隱セシムルカ又ハ退隱料ヲ給スヘキカ又ハ幾許ノ退隱料ヲ給スヘキカハ上等官署ニ於テ之ヲ定ムヘシ若シ帝ヨリ任シタル官員ナルハ帝ノ許可ヲ要スヘシ

第五十五條 退隱ノ期日ハ退隱スル者ノ申立ニ因ルカ又ハ官署ノ許可ヲ以テ退隱時限ヲ速カニスルニ非サレハ退隱及ヒ退隱料ノ決定

ヲ通知シタル翌月ヨリ三月ヲ經ル後ニ退隱ノ始マルモノトス

第五十六條 退隱料ハ月々始メニ給スル者トス

第五十七條 左ノ場合ニ於テハ退隱料ヲ停止スヘシ

第一退隱シタル者ノ獨乙國民權ヲ失ヒタルハヨリ再ヒ之ヲ得ルマテ

第二退隱シタル者ノ再ヒ官ニ就キ俸給ヲ受ケタルハ其俸給ト退隱料トヲ合算シ先官ノ俸給ヲ越エタル分

第五十八條 退隱シタル者ノ再ヒ官ニ就キ其後復タ退隱スルハ後官奉職ノ年限少クモ一年ヲ勤ムルニ非サレハ前後ノ年限ヲ通算シ後官ノ俸給ニ從テ退隱料ヲ受クルヲ得ス

前項ノ退隱料ヲ給シタルハ其金高ニ至マテノ前退隱料ハ消滅ス

ルモノトス

第五十九條 退隱シタル者ノ再ヒ官ニ就キ其後復タ退隱スルキハ後官ノ退隱料ト共ニ第五十七條第二ノ計算ニ從テ前官ノ退隱料ヲ給スヘシ

第六十條 第五十七條ヨリ第五十九條マテノ規則ニ從テ退隱料ヲ消滅シ又ハ停止シタリ又ハ再ヒ給スルコトハ右等ノ變更ノアリタル翌月ヨリ始マル

退隱料ヲ受クル者ノ一時出仕シテ日當或ハ慰勞金ヲ受クルキハ第三十條ノ規則ヲ適用ス可シ

第六十一條 盲目及ヒ聾トナルカ又ハ身体不具ト爲ルカ又ハ身体精神衰弱シテ其職務ヲ奉スルコト能ハサル官吏ハ之ヲ退隱セシムヘシ

第六十二條 前條ノ場合ニ於テ自カラ退隱願ヲ出サ、ルキハ長官ヨリシテ本人又ハ管財人ニ退隱スヘキ理由ト退隱料トヲ記載シテ退隱スヘキコトヲ告知スヘシ

第六十三條 若シ官員ノ前條ノ告知ヲ受ケタル後六週間内ニ故障ヲ申立サルキニハ自カラ退隱願ヲ出シタル者ト同様ニ之ヲ退隱セシムヘシ

此場合ニ於テハ退隱ヲ命シタル翌月ヨリ三箇月間ハ俸給ノ全額ヲ給スヘシ

第六十四條 若シ故障ヲ申立タルキハ上等官署ニ於テ其裁判ヲ爲スヘキヤ否ヲ先ツ決スヘシ

若シ裁判スヘキモノト決スルキハ上等官署ヨリ專任者ヲ命シテ其

事件ヲ審査セシメ證據人又ハ監財人ヲ其席ニ出頭セシムヘシ
其審問ノ終リニ本人又ハ監財人ヲシテ其辨明ヲ爲サシムヘシ
其審問ノ時ハ誓約ヲ爲シタル書記ヲ立會ス可シ

第六十五條 前條ノ審問書類ハ上等官署ニ差出スヘシ上等官署ハ審
問ノ十分ナラサル場合ニハ更ニ其審問ヲ爲サシムルコトヲ得
本人ノ過誤ニ因リ審問ノ十分ナラサル場合ノ正金立替ハ本人ヲシ
テ之ヲ負擔セシムヘシ

第六十六條 帝ヨリ任セラレタル官員ヲ退隱セシムルニハ帝ト上院
ト協議シタル上之ヲ退隱セシムヘシ
其他ノ官員ハ上等官署ヨリ裁判シテ之ヲ退隱セシムヘシ其命令ニ
對シテハ四週間内ニ上院ニ故障申立ヲ爲スコトヲ得其故障ヲ爲スト

雖モ上等官署ハ其官員ヲシテ一時其職務ヲ行フコトヲ差止ムルコトヲ得
第六十七條 退隱セシムル者ノ俸給ハ帝又ハ上等官署ヨリ退隱ヲ告
知シタル翌月ヨリ三箇月間ハ之ヲ給スヘシ

第六十八條 退隱料ヲ受クヘキ年限ニ至ラサル前ニ官員ノ其職務ヲ
奉スルコト能ハサルニ至リタル場合ニ於テ本人ヨリ退隱ヲ願出サル
者ヲ退隱セシムルニハ懲戒裁判ノ手續ニ從ハサレハ退隱セシムル
コトヲ得ス

然レモ上等官署ト上院ト協議ノ上ニテ退隱料ヲ受クヘキ年限ヲ經
テ退隱シタル者ノ退隱料ヲ給スヘキコトヲ至當ナリト見做シタル所
ハ第六十一條ヨリ第六十七條迄ニ從テ退隱料ヲ給スルコトヲ得

第六十九條 退隱シタル者死去シテ跡ニ寡婦又ハ正當ノ子ヲ遺シタ

ルルハ死去シタル翌月分ノ退隱料ヲ給スヘシ但何人ニ之ヲ交付スルヤ否ハ上等官署ニ於テ之ヲ定ムヘシ

前項ニ掲ケタル者ヲ死後ニ遺サスト雖其兩親兄弟姉妹及ヒ兄弟ノ子又ハ養ヒ子ヲ保養スヘキ義務アルニ其財産ヲ遺サ、ルカ又ハ死前ノ雜費醫藥埋葬料ヲ拂フコト能ハサルルハ上等官署ノ許可ヲ以テ一月分ノ退隱料ヲ給スルコトヲ得

一月分ノ退隱料ハ財産取押ノ時之ヲ取押フルコトヲ得ス

第七十條 此規則ニ從テ給スヘキ退隱料カ此規則發行前ニ退隱シテ其時ノ退隱料規則ニ從テ受クヘキ退隱料ヨリ少ナキルハ其規則ニ從テ退隱料ヲ給スヘシ

第七十一條 此規則ヲ發スル前ニ獨逸政府ト連邦政府ト條約ヲ結ビ

連邦官吏ヨリ獨逸國官吏ト爲ル者ノ退隱料ヲ定メタル時ハ其後退隱スル者ニハ其條約ニ從テ退隱料ヲ給スヘシ然レモ此規則ニ從テ給スヘキルハ其官員ノ利益ト爲ル者ハ此規則ニ從テ給スヘシ

第七十二條 官員タル者ハ其擔任シタル義務ヲ盡サル時ハ(第十條ヲ指ス)職務上ノ所犯ナリトシ懲戒ノ罰則ニ處スヘシ

第七十三條 懲戒罰則ハ第一懲罰第二免職

第七十四條 懲罰トハ一呵責ニ譴責ニ罰金但俸給ヲ受クル官吏ハ一月ノ俸給以内無給ノ官吏ハ三十「ターレ」以内
罰金ハ譴責ト併科スルコトヲ得

第七十五條 免職トハ第一懲戒トシテ轉職セシムルコト
懲戒トシテ轉職セシムルニハ同等ノ官ニシテ多クモ五分一減少ナ

ル俸給ヲ受クヘキ他ノ官ニ轉スヘシ又俸給ヲ減少セスシテ罰金ヲ科スルコトアリ然レモ其罰金ノ高ハ一年ノ俸給ノ三分一ヨリ越ユ可カラス

懲戒トシテ轉職セシムルニハ上等官署ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第二職務ヲ免スルコト

職務ヲ免シタルモハ自然尊號及ヒ退隱料ヲ求ル權利ヲ失フヘシ但懲戒裁判ヲ終ル前ニ自ラ辭職シタルモハ其本人ヨリシテ裁判費用ヲ擔當シ且自カラ尊號及ヒ退隱料ヲ求ムル權ヲ放棄スルニ非サレハ直チニ尊號及ヒ退隱料ヲ求ムル權ヲ失フヘキ裁判ヲ爲スヘシ

本人ノ退隱料ヲ求ムルコトヲ得ヘキ年限ヲ勤メタル者ニシテ別段輕

減スヘキ事情アルモハ懲戒裁判所ハ同時ニ退隱料ノ一部ヲ終身又ハ年限ヲ定メ之ヲ給スルコトヲ決定スルヲ得

第七十六條 第七十三條ヨリ第七十五條マテノ如何ナル罰ヲ科スヘキヤハ職務上所犯ノ輕重ト平常ノ行狀トニ因リ之ヲ定ムヘシ

第七十七條 通常裁判所ニテ審問中ハ同事件ノ爲メ懲戒裁判ヲ開クコトヲ得ス

懲戒裁判手續中ニ同事件ニ付キ通常裁判ノ始マリタルモハ懲戒裁判手續ヲ中止スヘシ

第七十八條 刑事裁判所ニテ放免ト爲リタルモハ其審問ヲ受ケタル事件カ刑法ニ關係ナクシテ特ニ職務上ノ所犯ニ係ル者ニ非サレハ其事件ノ爲メ懲戒裁判ヲ開クコトヲ得ス

刑事裁判所ニ於テ判決ヲ受クルモ仍ホ其職務ヲ失ハサルハ懲戒
裁判ヲ爲スヘキ官署第八十四條第一項ニ於テ懲戒裁判ヲ開クヘキカ又ハ更
ニ懲戒裁判ヲ續クヘキカヲ裁定スヘシ

第七十九條 懲戒裁判ニ係リタル所犯ヨリシテ損害ノ償又ハ民法上ノ
義務ヲ生シタルハ其訴ハ民事裁判所ニ爲スヘシ但長官ヨリシテ
犯則ノ收入金又ハ刻留シタル金高ヲ納メシムルハ此限ニ在ラス

第八十條 長官ハ其屬官ニ對シ呵責譴責ヲ爲スコヲ得

第八十一條 罰金ハ第一上等官署ヨリハ都テノ官吏ニ對シ科スルコ
ヲ得其金高ハ第七十四條ニ從フヘシ

第二上等官署ノ所屬ノ官署及ヒ其長ハ「十ターレ」以内ノ罰金ヲ
科スルコヲ得

第三其所屬官署ノ所屬官署及ヒ其長ハ「三ターレ」以内ノ罰金ヲ
科スルコヲ得

第八十二條 懲罰ヲ科スル前ニハ其官吏ニ其所犯ニ付辯明ヲ爲スヲ
得ヘキ猶豫ノ時間ヲ與フヘシ

懲罰ヲ科スルニハ理由ヲ掲ケタル命令書ニ因テ之ヲ爲スカ又ハ調
書ヲ作テ言渡スヘシ

若シ期限ヲ定メ特別ニ命令シタル事ヲ怠ルハ豫メ罰金ヲ科スヘ
キコヲ通知シタルニ其期限ヲ過キテ仍ホ命令ノ如クセサル者ハ直
チニ罰金ヲ科スルコヲ得

第八十三條 懲罰ノ命令ニ對シテハ止タ一等上ノ官署ニ故障ヲ爲ス
コヲ得ルノミ

第八十四條 免職ハ必ス懲戒裁判ノ手續ヲ以テ之ヲ爲スヘシ其裁判

ハ上等官署ヨリ命令ヲ發シ之ヲ開カシムヘシ

懲戒裁判ハ豫審ニテ調書ヲ作り對審ニテ公判スヘシ

第八十五條 上等官署ハ豫審掛及ヒ檢事ノ職務ヲ行フヘキ者ヲ命ス

ヘシ

若シ至急ヲ要スル場合ニ於テハ第八十一條第二ノ官署又ハ其長ヨ

リ命令ヲ發シテ懲戒裁判ヲ開カシメ且假リニ豫審掛ヲ命スルコトヲ

得然ル後上等官署ノ許可ヲ得ヘシ若シ上等官署ニ於テ許可セサル

トハ其裁判手續ヲ中止スヘシ

第八十六條 懲戒裁判所ハ其權限ヲ分チ之ヲ組立ツルコト左ノ如シ

第一 始審懲戒裁判所

第二 控訴懲戒裁判所

第八十七條 始審懲戒裁判所ハ左ノ地方ニ一箇所ツ、設クヘシ

ポツダム、フランクフル(ア)(ヲ)、キョーヒスベルヒ、ダンチ

ヒ ステチーシ、キヨスリン、ブロンベルヒ、ポーピン、マ

クデブリヒ、エルフル、ト、プレスラウ、リ、ブニツツ、ヲツ

ペルン、ミュンステル、アルンスベルヒ、シュツセルドルフ

キヨルン、トリエル、ダルムスタット、フランクフルト(ア)(エム)

カツセル、ハノーフル、シュレースイヒ、ライプチヒ、カル、

スウル、シュレーエルイン、リエベツキ、ブレイメン

帝ト上院ト協議ノ上布告ヲ發シテ其他ノ地方ニ始審懲戒裁判所

ヲ設クルコトヲ得